

希望が丘 夏休み わんぱくキャンプ 実施報告書

<報告の概要>

本キャンプにおいては、明確なテーマおよびストーリーを掲げ、その理念を基盤として参加者一人ひとりの「生きる力」ならびに「非認知能力」の向上を目的に、さまざまな工夫を凝らしつつ活動を展開した。特に、単なる知識や技能の習得にとどまらず、人間形成に直結する心の成長を重視し、「思いやり」「強い絆」「深い感動」といった主観的ながらも教育的に重要な指標を大切に据えた点が特徴である。

さらに、環境保全および持続可能な社会の構築という観点から、国際的に広く共有されているSDGsの理念を踏まえつつ、地域性を考慮して滋賀県独自に策定されたMLGs（滋賀県版SDGs）の枠組みに基づき、特にその中から4つの重点項目を抽出し、計画的かつ実践的に取り入れた。このように、地域課題を意識することで、参加者が身近な自然環境と社会のつながりを実感できるよう配慮している。

プログラムの構成にあたっては、自然の魅力を手感的に楽しむ場を提供することを中心に据えながらも、単なる体験に終始するのではなく、「自分で考えて行動する力」と「仲間と協力して物事を解決する力」という二つの基盤的能力を獲得できるよう意図的に設計した。自然の中での活動を通じて、身体的な健全さと精神的な成熟を同時に育むことができ、今後の人生において不可欠となる持続的な学びの姿勢を培うことを目指したのである。

- | | | |
|----|-----------------|----------------------------|
| 3 | 「多様な生き物を守ろう」 | → ●身近な自然を知る、学ぶ ●間伐等、森林保全活動 |
| 4 | 「水辺も湖底も美しく」 | → ●ゴミ排出量の削減 ●マナーを守っての行動 |
| 5 | 「恵み豊かな水源の森を守ろう」 | → ●里山の保全 |
| 10 | 「地元も流域も学びの場に」 | → ●自然体験プログラム |

上記の項目を中心に、計画、実践を行う。



Mother Lake Goals

変えよう、あなたと私から

MLGs：マザーレイクゴールズ（Mother Lake Goals）は、「琵琶湖」を切り口とした2030年の持続可能社会へ向けた目標（ゴール）です。2030年の環境と経済・社会活動をつなぐ健全な循環の構築に向け、琵琶湖を切り口として独自に13のゴールを設定しています。

希望が丘キャンプリーダー：基礎的な野外活動や自然体験の理論や実技を身につけ、主催事業企画立案・運営に関わる手法を習得し、実際に現場で活動を行い、公園利用者の対応をいただくことが活動の目的です。また、この滋賀県希望が丘文化公園のフィールドで「人と人」、「人と自然」をつなげる大切な役割があり、様々な活動に参加いただいています。

希望が丘 夏休み わんぱくキャンプ 実施報告書

— 目 次 —

P 3	「テーマ」と「現状と課題」
P 4	わんぱくキャンプ フレーム
P 5	「ねらい」と「10の大きなプログラム」の結果・所感
P 9	ストーリーが子どもたちに与えた影響
P 15	本事業のスケジュール
P 24	本事業の安全管理体制（令和7年度版）
P 25	CLの対応について
P 26	アンケートとアンケート比較
P 29	アンケートの結果に対するCLからの所見
P 38	保護者アンケートと意見・感想
P 43	MLGsの取り組み
P 47	7日間の経験を通じて ～CLの視点から感じたこと・成長できたこと・反省～
P 58	みんなのBIWAKO会議 資料（2025 / 8 / 27開催） 『希望が丘夏休みわんぱくキャンプ』
P 59	第29回日本キャンプミーティング 資料（2025 / 11 / 8日開催） 『希望が丘夏休みわんぱくキャンプ 見聞録』
P 60	第24回関西野外活動ミーティング2026 資料（2026 / 3 / 1開催） 『長期自然体験について —希望が丘夏休みわんぱくキャンプから考える—』
P 62	希望が丘キャンプリーダー活動の継承と全国発信に向けて
P 64	令和7年度文部科学省委託事業 「希望が丘夏休みわんぱくキャンプ」実施後評価

【テーマ】 心から心へ ～自立と協力の7日間～

【目的】 参加者自身が自分と向き合い、まわりを見つめ、チームの一員として3つの項目を目的とする

◎自分の参加動機とこのキャンプの目標をしっかりと認識する。

◎そのためにみんなと考え方ややり方を話し合い工夫する。

◎参加者同士協力し、目標達成を目指して粘り強く取り組む。

☆7日間の自然の中での生活を通して、「自分で考えて行動する力」と「仲間と協力して物事を解決する力」の2つの力を習得し、互いに心（非認知能力や生きる力等）を成長させる。また里山の保全などを学ぶことを通して自然とも心を通わせる。

◎現状と課題

①「生きる力」や「非認知能力」への、子どもたちの関心の薄さは、コロナ禍の影響が少なくなったとはいえ、あの数年間に大きな要因があり、現在でも対面経験の欠如やフィールドワークの体験機会の減少、ネット環境における仮想体験への偏りなどが起因し、また学校現場でこのような機会が未だ不足している。

特に小学生の成長における「体験」の繰り返しより

- 相手の気持ちを読み取り、思いやる力
- 自分の気持ちを表現する力
- 自分を好きだと思ふ気持ち
- 自然への興味など

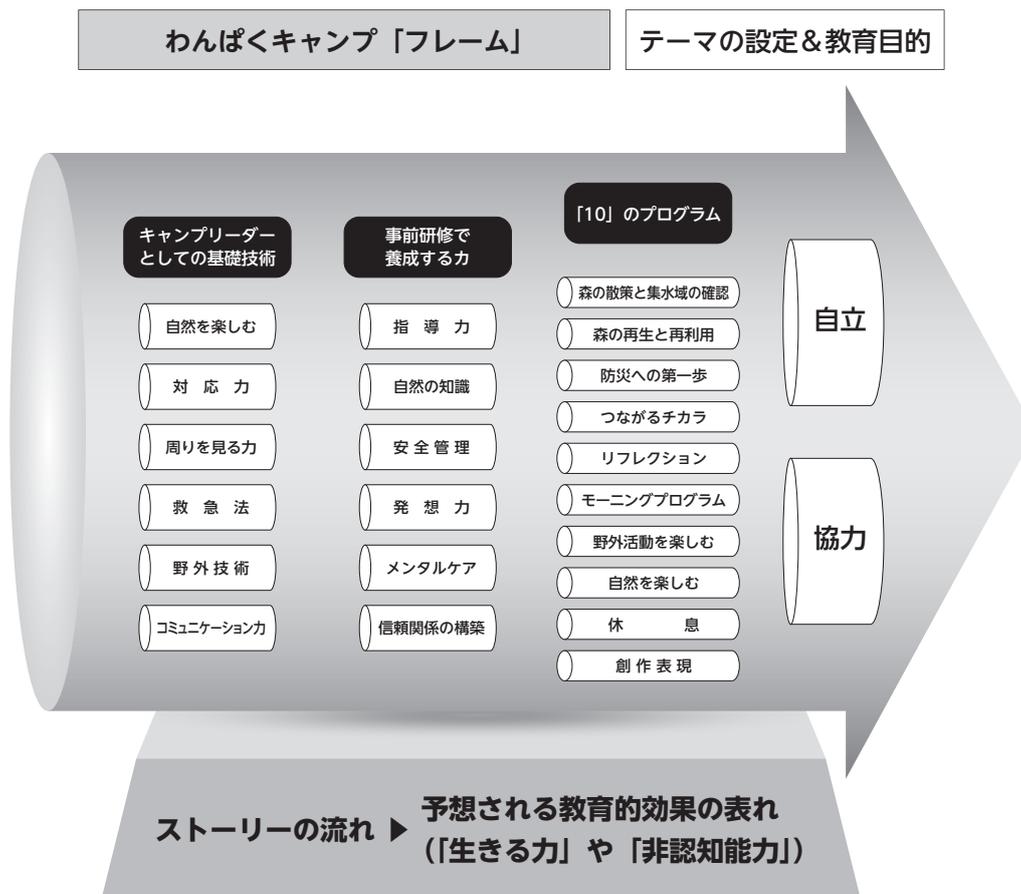
左記を学んでいくには、難しい現状であり、解決していかなければならない課題と考える。

②自然や環境への理解不足も、状況は上記と同様である。SDGsは、学校で学ぶ機会は増えているが理論や机上での議論が多く、実体験での機会が乏しい。与えられた課題には取り組むが、自分を取り巻く環境で自ら考え、継続して行動する機会は少ないことが現状である。この実体験の場を与えることが大切である。

③指導者の指導方法に対する考えが定まっていない。そのため、希望が丘キャンプリーダーは、研修会等に積極的に参加し、リーダー自身がさらに経験を重ねる必要がある。また、指導方法の柱を明確にするため、キャンプリーダーで議論を行い、多様な意見を取り入れながら指導マニュアルを作成する必要がある。

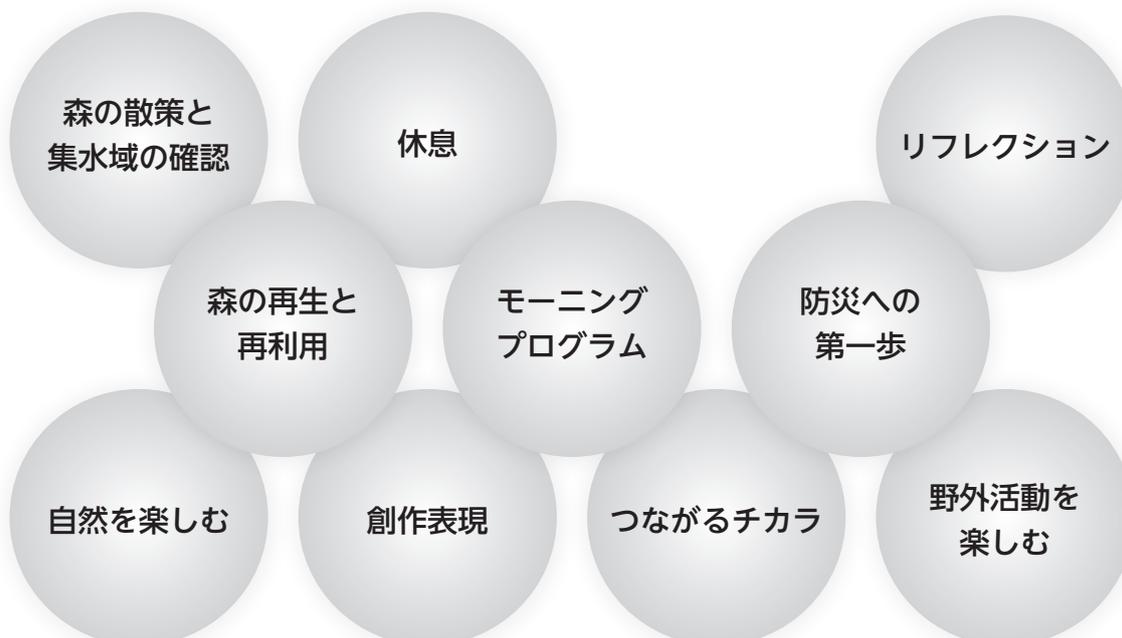


◎わんぱくキャンプ フレーム



令和7年度希望が丘夏休みわんぱくキャンプでは、「10のプログラム」を計画し、これに沿って実施していた。「10のプログラム」を実施するためには多くの技術や力が必要である。

上記の図では、それぞれの段階【キャンプリーダーとしての基礎技術】【事前研修で養成する力】ほかに分けて、どのような力が必要であることを記載している。



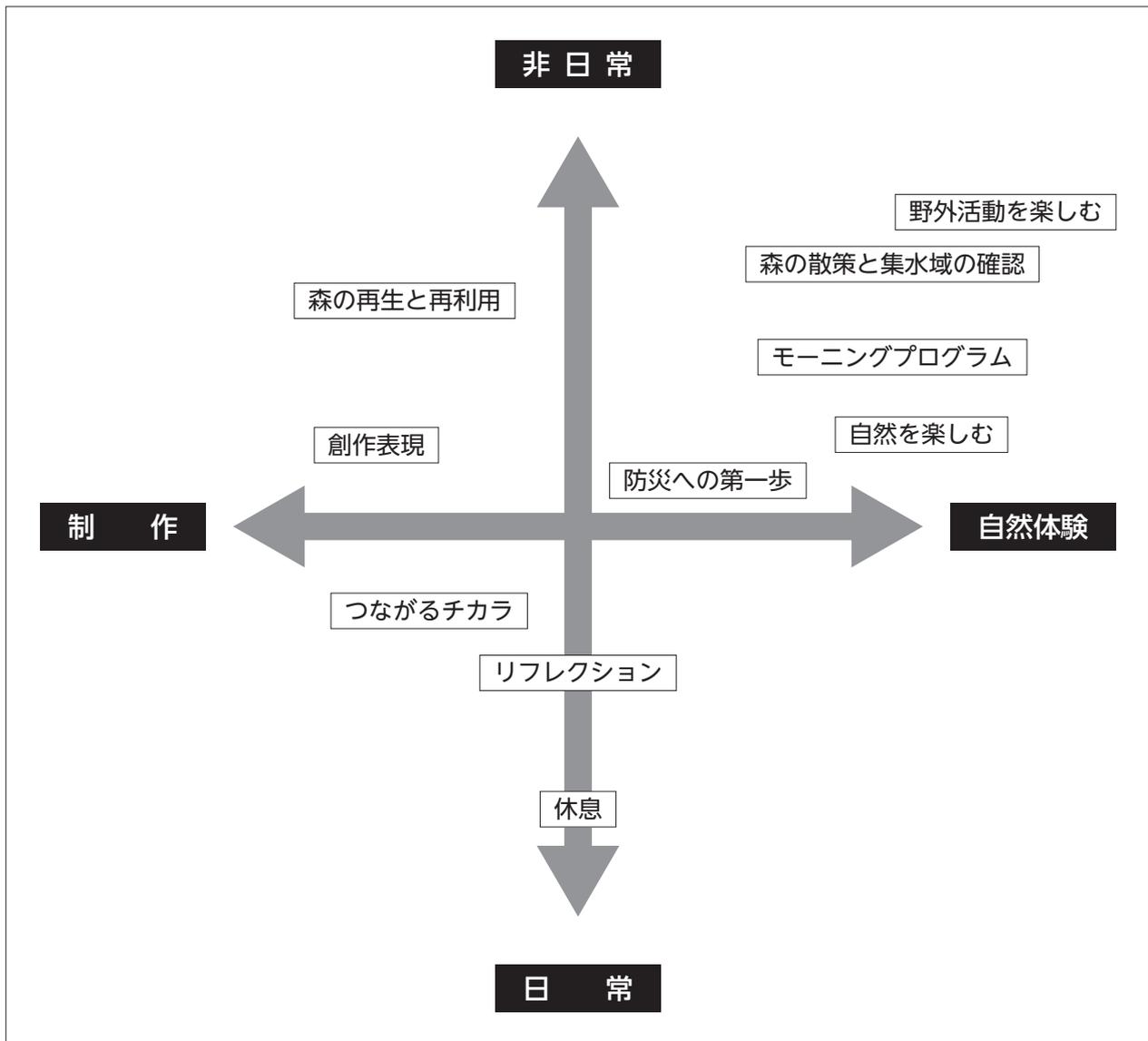
◎ねらい

7日間のキャンプを通して、様々な生き物の働きや命のつながり、自分と自然とのつながりに気づくことを目指す。自然の中で生きている自分に気づき、家に帰った後も、生き物や植物を無闇に傷つけないことや、食事の際に「いただきます」「ごちそうさま」を心を込めて言うことなどができる、命を大切にすることの姿を育てたい。

◎「10の大きなプログラム」の結果・所感

本キャンプを「10の大きなプログラム」で骨組みを作成、これに沿ってプログラムを実施した。

●「10の大きなプログラム」の位置づけ



リフレクション (reflection) とは、自己の経験や行動を振り返り、内省するプロセスを指します。

【教育における重要性】 リフレクション教育は、リーダーシップや自己成長を促進し、学習効果を高める手法として取り入れられています。

教育への影響

- ⑦自己成長への影響
- ⑧批判的思考の促進

- ①リーダーシップ育成
- ④学習効果の向上

- ⑨教育プログラム

1. 『森の散策と集水域の確認』

ねらい	五感を使って、自然と親しみ、関心を深める。 自らの歩みを積み重ね、活動フィールドが水源として機能していることを学ぶ。
指導の工夫	子どもたちが歩きながら、砂防ダムや雨水の行方、分水嶺などについて問いかけを通して学び、活動場所の理解を深める。また、途中で立ち止まって五感を使った観察を行い、感覚を磨く。さらに、仲間同士で助け合いながら歩き、周囲の植物にも注目して観察する。
結果・所感	天候による中止や変更はあったものの、ハイキング活動を通して子どもたちは自然に触れ、学びや気づきを深めた。登山では自然への興味を高め、協力して安全に活動できた。一方で、雨天時の代替活動や実施方法の工夫が今後の課題として残った。

2. 『森の再生と再利用』

ねらい	森も生きており、間伐などの手入れをする大切さを知る。 資源を大切に使うことの大切さに気づき、自然と共に生きる意識や行動する力を育てる。
指導の工夫	子どもたちが間伐材を思い出しながら活用できるようにし、自分で木を選ぶことで特徴に気づき、愛着を持てるように促す。ロープワークを使って協力しながら木を組み合わせ、加工されていない木でも活用できることを伝え、体験する機会を設ける。また、ゴミ拾いや薪集めを通して、細かな木も資源として有効であることを伝える。
結果・所感	キャンプ前の学習と本番での問いかけにより、子どもたちは間伐や森を守る意識を深めた。間伐材の活用を通して森への愛着が育まれた一方、ランタン台のロープの緩みや雨の影響による使用困難などの課題が見られ、代替策の検討が必要となった。全体として、自然保全や再利用への理解が進んだ。

3. 『防災への第一歩』

ねらい	いつ起こるか分からない災害のときに役立つ知識を身につける。 仲間と助け合う大切さに気付く。
指導の工夫	メスティンの蓋をお皿として使い、洗い物と水の使用量を減らすことで、水の大切さを考えるきっかけとする。またツナ缶の汁を流さず再利用することで、環境への配慮と資源の有効活用を学ばせる。
結果・所感	メスティンを使って多様な調理法を学び、持ち帰ることで日常生活にも生かせる経験となった。段ボールオープン作りでは廃材を利用した調理を通して非常時の工夫を学び、雷雨時には譲り合いや協力の姿勢が育まれた。

4. 『つながるチカラ』

ねらい	仲間と協力し合いながら、一人ではできないことに挑戦する。 自分の役割を理解し、チームに貢献する行動を学ぶ。活動を通じて関係性を深め、「一緒にいること」の心地よさを感じる。
指導の工夫	毎日の振り返りで良い点を共有し、食べ物を大切にして廃棄を減らす意識を育てる。7日間を通して助言を減らし、子どもたちが主体的に判断・行動できるよう自立を促す。グループ内では役割を守り、互いに声を掛け合いながら協力する姿を見守る。
結果・所感	アイスブレイクで遊びを通じて自己紹介を行い、緊張を和らげて交流を深めた。危険予知トレーニングでは仲間と危険を共有し、安全意識が向上した。調理活動では協調性や自主性が育まれたが、初期段階での技術指導に工夫が必要だった。地図作りを通して自然への関心と観察力が高まり、食材調達戦では水や間伐の重要性を学びながら協力して食事づくりに取り組んだ。

5. 『リフレクション』

ねらい	気づいたことや、学んだことを自分の言葉で言語化する力をつける。 単発のプログラムで終わらせず、継続的に成長を促すことで、他のプログラムに生かすことができる。
指導の工夫	キャンプリーダーには、子どもたちが自ら考えられるように問いかけを重視する指導を行う。毎日の絵日記や振り返りを通して成長を「見える化」し、自分の意見を積極的に発表できるように促す。活動全体を通して、子どもたちが考えを言語化し、自由に意見を共有できる環境づくりを意識する。
結果・所感	子どもの意見に共感し、自ら確かめる姿勢を重視したことで、班内に意見を出し合いやすい雰囲気生まれた。キャンドルセレモニーでは深い共有の時間となったが、時間不足が課題として残った。6泊7日の活動を通して、子どもたちは協力や自己表現の力を伸ばし、仲間と意見を出し合いながら考える力を育むことができた。

6. 『モーニングプログラム』

ねらい	朝から体を動かすことで1日を前向きに活動できるようにする。 朝一番の自然に触れ、普段とは違った活動フィールドに触れる。
指導の工夫	朝のハイキングでは自然を感じる活動を予定していたが、中止となった。朝の集いではF3が劇を通して1日のテーマを発表し、子どもたちの理解を促す。朝の体操では、明るい声かけで子どもたちが元気に活動を始められるようにする。
結果・所感	朝のハイキングは朝食準備の都合で中止となり、今後は余裕のあるスケジュール設定が課題となった。起床後の時間も短く、自然に触れる余裕がなかったため、今後はその時間を確保する必要がある。一方で、朝の体操や歌、F3の劇を通して士気と団結力を高め、1日の目標を意識して行動できた。

7. 『野外活動を楽しむ』

ねらい	自然の中での活動を通して、子どもたちが自然と触れ合う楽しさ、面白さを体感する。 楽しむという気持ちを大切に、野外活動への関心を育てる。
指導の工夫	活動の前後で前向きな声かけを行い、子どもたちの意欲を高める。達成感や楽しさをリーダーや仲間と共有する時間を設け、活動の楽しさを再確認できるようにする。
結果・所感	ネイチャーゲームでは自然の音に集中し、感覚を磨く体験ができた。リーダーの介入を控えたことで、子どもたちが主体的にルールを決めて楽しむ姿が見られた。ファイヤーでは交流と盛り上がりが見られたが、一体感づくりや意欲の低い子への働きかけが課題となった。食材調達では水や間伐の重要性を学び、協力しながら自信を深めた。ロープワークでは基本技術を学び、仲間と協力して制作を進める中で協調性を育むことができた。

8. 『自然を楽しむ』

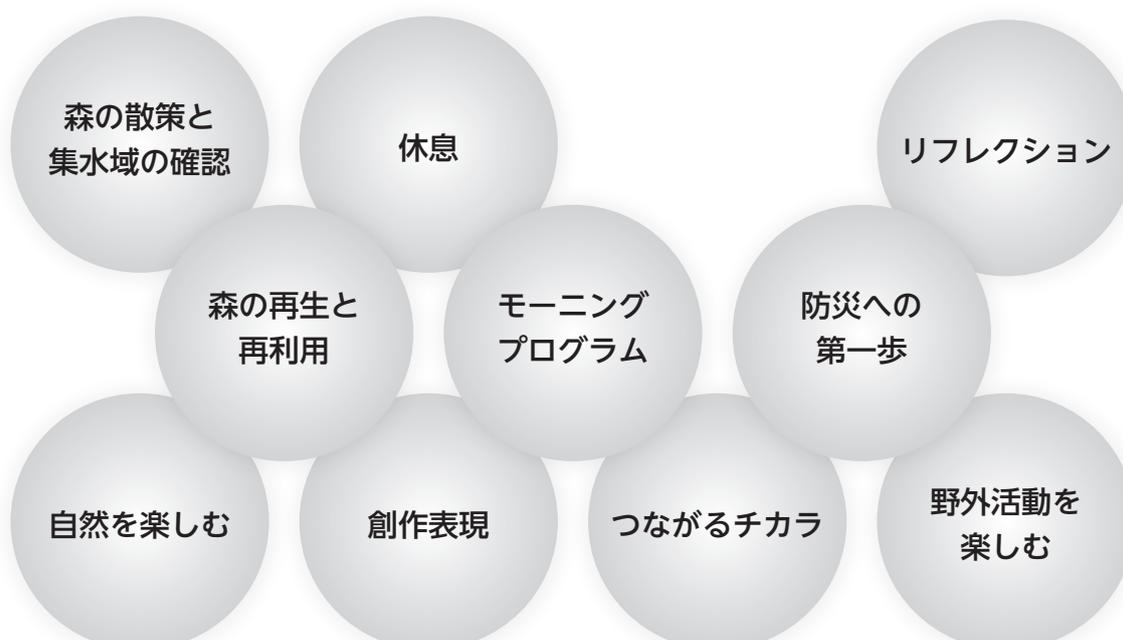
ねらい	活動をしている希望が丘文化公園のフィールドを生かして、自然と触れ合うことを楽しむ。
指導の工夫	テント泊や川遊びでは、虫の声や風の音など自然の中での新しい発見を促す。鮎のつかみ取りでは命の尊さを学ぶことを目的とし、捕まえた魚を調理して食べる体験を行う。ハイキングやクラフトでは木や間伐について学び、森林環境を守るための大切さを理解できるよう声かけを行う。
結果・所感	テント泊や川遊びを通して、虫の声や風の音など自然の魅力を感じ取れるように促した。鮎のつかみ取りでは命の尊さを学ぶことを目的とし、捕まえた鮎を調理・食事する体験を行った。ハイキングやクラフトでは木や間伐について学び、森林を守るために間伐が重要であることを理解できるように指導した。

9. 『休息』

ねらい	万全の体調で活動するため、可能な限り昼寝をする。 熱中症対策として、活動の間にこまめな水分補給をする。
指導の工夫	休息の大切さを伝えるイラストを用いて、心身の健康維持に必要であることを視覚的に説明する。休みたくない子どもには無理に休ませず、静かに過ごすよう促す。昼寝が難しい子には寝転がって目を閉じるよう声かけを行い、また熱中症予防のためにこまめな水分補給を促す。
結果・所感	昼寝や就寝で休息不足や眠れない子が見られ、活動に影響があった。昼寝をしない子は静かに過ごしていたが、夜は会話で眠れない子もいた。水分補給は意識されていたものの不十分な場面もあり、今後は昼寝時間の確保や一斉の水分補給、安心して休める就寝環境づくりが課題となった。

10. 『創作表現』

ねらい	食材の皮や段ボール、ツナ缶の汁等、廃棄予定だったものを使い、自分たちで作る喜びを感じる。 食べ物に感謝すること、廃材・廃棄のものを再利用する楽しさ・大切さを学ぶ。
指導の工夫	すべてのプログラムをつなげて考え、食を通して感謝の心を育てるために「いただきます」「ごちそうさま」を実践する。リーダーの声かけを減らし、子どもたち自身で考える時間を設ける。廃棄予定のものを再利用する大切さを伝え、班で協力しながら制作を進めるよう促す。また、制作時には安全面に配慮し、怪我防止への意識づけを行う。
結果・所感	子どもたちは協力して活動をほぼ完成させ、廃油を無駄にしないなどMLGsを意識して取り組んだ。時間不足で一部完成できなかった部分もあり、今後は時間管理の指導が必要。リーダーが見守る中で、子どもたちの達成感と成長を感じられた。



◎ストーリーが子どもたちに与えた影響

<ストーリー概要>

初めて会ったときに妖精さんからもらった、秘密の地図。それをもとにわんぱくキッズが探検していると、たどり着いたのは妖精さんたちの家だった。妖精さんがみんなで完成させた大切な本を見せてくれようとする、本の中身が真っ白になっていた。

「えっ、どうして?! みんなに協力してもらったのに……」

と、妖精さんたちは悲しんでいる様子。書いてあったことを思い出そうとしても、なかなか思い出せないようだった。そこで本の中身を復活させるために、わんぱくキッズは妖精さんたちを手伝うことに。

何かヒントがないかと、妖精さんと一緒に歩いていると、困っている生き物と出会う。どうやらその生き物は、自然の中で“お仕事”をしているらしい。そのお仕事を妖精さんたちと一緒に手伝っていくことにする。その中でわんぱくキッズは生き物と同じ視点を知る。また自然との関わりや協力の大切さを知っていく。

日が沈むころ妖精さんたちとわんぱくキッズが「生き物や自然について、たくさん知ることができたね!」と話していると、妖精さんが持っていた本が光り出し、本の1ページ目が復活する。そこには、今日1日で発見した生き物や自然のことがたくさん書かれていた。

**「そうだ! ここには、たくさんの生き物のことが書かれていたんだ!
みんなのおかげで思い出すことができたよ!」**

と、妖精さんたちはとっても嬉しそう。それから困っている生き物のお手伝いをたくさんすると2ページ目、3ページ目と次々に本のページが復活していく。しかし、7日目になっても最後のページだけが元に戻らない。どうすれば良いかわからず、今までやったことを振り返ったら何かヒントがあるのではないかと思い7日間の出来事を話す。

すると、今までにないくらい本が光り出し、ついに最後のページが復活。本が完成したのだった。妖精さんたちも、生き物たちも、わんぱくキッズも、みんな大喜び。本が完成し、妖精さんたちとはお別れになるけれど、わんぱくキッズの発見はこれからも続いていく。



<ストーリーが与えたと考える影響>

ストーリーはこの7日間を活動する中で、子どもたちやプログラムに様々な影響を与えていた。1日の始まりには、妖精さんと困っている生き物と出会い、その日のテーマが発表される。ストーリーや生き物を通して、1日の活動目標を提示することで、単にテーマを発表するよりも子どもたちの印象に残りやすくなっていた。また、プログラム内で妖精や生き物たちが出てきたことで、妖精さんやその生き物を手伝おうという、協力の姿勢が見られ、活動への意欲が高まったように感じられた。これは、「思いやり」や「自然への関心」、「積極性」の向上につながった部分でもあると言える。

さらには、ストーリーを通して、生き物について知識を広げることもできた。ストーリー内に出てきた生き物たちは、希望が丘文化公園内にも生息しており、いくつかの生き物は実際に見ることもできた。それに加え、1日目の夜に生き物や自然について知ったことで、本のページが復活することがわかり、2日目以降、より自然に興味を持ち観察するきっかけとなった。

これはMLGsの『03 多様な生き物を守ろう』、『10 地元も流域も学びの場に』につながるものである。

子どもたちはハイキングや間伐材を使用したプログラムなど、様々な活動を通し、日ごとに新しい発見を重ねていた。その発見は前日のものとは異なり、その日の活動を経ての新たな視点からの発見であった。本のページが復活するという“見える成果”があったことも活動への意欲の向上、達成感へつながったと考える。

<妖精について>

今回の活動フィールドである希望が丘文化公園は赤松やコナラを中心とした森林が広がっており、多くの植物がある。しかし、普段から希望が丘文化公園で活動しているCLも自然への関心は高いとは言えず、子どもたちに説明できる人は少なかった。

本キャンプに参加するCLと子どもたちが楽しんで自然への関心を持ってもらうにはどうしたら良いかと考えた。そのときに、自然と私たちの距離を近づけることが重要であると考えた。そこで植物と親しんでもらうことを目的として植物の妖精を作成することにした。子どもたちが宿泊する場所を中心に特徴的な植物を7種類選んだ。



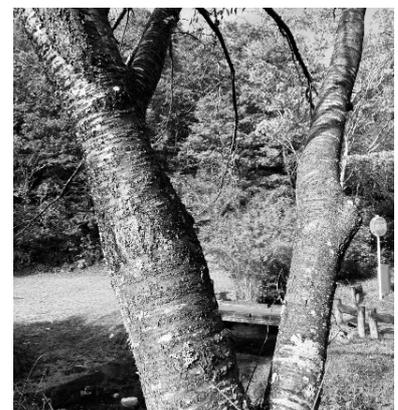
いろはモミジ

【選んだ植物】

- アカマツ ●コナラ ●いろはモミジ ●ユズリハ
- ヤマザクラ ●リョウブ ●サルトリイバラ

これらの植物を本キャンプ準備期間にCLに観察してもらい植物の特徴をとらえたキャラクターを作ってもらったことにした。また、その妖精たちを子どもたちの活動班のマスコットキャラクターとして位置づけ、より親しみを覚えてもらえるようにした。

各班の名前は『〇〇な【妖精の名前】隊』とした。【妖精の名前】の部分はCLが考えたものであるが、〇〇の部分はキャンプ中に子どもたちが植物と触れ合っただけで感じたことを一言にまとめてあてはめた。このようにしたことによって子どもたちも植物と積極的に関わる場面が見られ、「この植物は□□?」という質問が多くあった。また、指導者側であるCLも植物に興味を持つきっかけとなり、活動フィールドの自然の豊かさを再認識することができた。



ヤマザクラ

MEMO



A series of horizontal dashed lines for writing, spanning the width of the page.



<各妖精の詳細>

【1班】まつぼん&ぼくぼく

モチーフとしている植物は、アカマツであり、幹が赤いことが特徴的であったため妖精を作ることに決めた。アカマツは長寿の植物であることからおじいちゃんをイメージさせる優しい雰囲気
の妖精となった。頭の帽子は、葉っぱを表している。まつぼんが
手に持っている妖精は、ぼくぼくであり松ぼっくりをモチーフに
している。松ぼっくりを描くことで、アカマツが身近にあるもの
であるということを伝えた。



まつぼん&ぼくぼく

【2班】こならん

モチーフとしている植物は、コナラであり特徴的な幹
が目立つことと活動フィールドに多くあることから妖精
を作ることを決めた。コナラはどんぐりを作る植物であ
るということから妖精にどんぐりの殻斗をイメージさせ
る帽子を被せた。妖精の前髪はコナラの葉っぱがギザギ
ザという特徴を取り入れ、ギザギザした形になっている。
妖精の服には葉っぱとどんぐりを描き、コナラはどんぐ
りの木とイメージできるようにした。また、2人の妖精
が手をつないでいる理由は、班のみんなが仲良く協力し
てほしいという意味をこめた。



こならん

【3班】ぱくもみ

モチーフとしている植物は、いろは紅葉であり、葉っぱが特徴
的な形で親しみやすいため妖精を作ることに決めた。妖精の額には、
いろは紅葉のギザギザを表している。妖精は、みんなにご飯をたく
さん食べてほしいという思いから希望が丘文化公園にも生息し
ているリスをイメージしている。植物だけでなく動物についても
子どもに知ってもらおう機会となった。



ぱくもみ



ユズリーナ

【4班】ユズリーナ

モチーフとしている植物は、ユズリハであり、葉っぱが特徴的
であったため妖精を作ることに決めた。ユズリハの葉っぱは、四
方八方に垂れ下がっており、ドレスに見えたことからバレリーナ
をイメージさせるデザインにした。全身に垂れ下がった葉っぱを
描き、植物の特徴が伝わるようにした。また、ユズリハの名前は
新しい葉っぱに場所を譲って古い葉っぱは落ちていくということ
に由来していることから妖精は優しい表情をしている。



やまざえもん

【5班】 やまざえもん

モチーフとしている植物は、ヤマザクラであり、特徴的な幹と桜という日本を代表する植物であることから妖精を作ることを選んだ。妖精の全身で桜の木をイメージしている。頭にあるお花と葉っぱは、ヤマザクラの特徴に「お花と葉っぱが同時に開く」ということを表している。

【6班】 りょうぶし

モチーフとしている植物は、リョウブであり、幹の様子が牛柄模様と特徴的なため妖精を作ることになった。リョウブの模様（牛柄模様）から江戸時代後期に活躍した新選組をイメージしたため武士のような見た目になった。服はリョウブの幹の柄をモチーフとしており、髪型はリョウブの葉っぱや枝をモチーフにしている。またリョウブは細く高いというものが多かったため背の高い妖精になった。



りょうぶし



©みんと

サルトリッチ

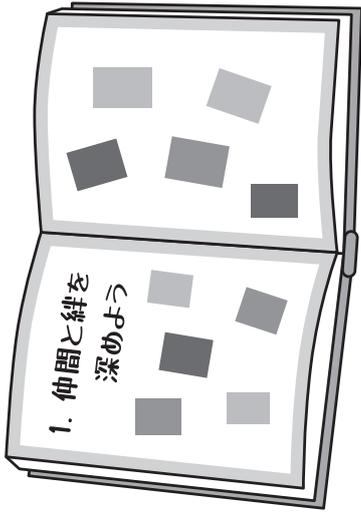
【カメラ係】 サルトリッチ

モチーフにしている植物は、サルトリイバラであり、特徴的な葉っぱとトゲが目にとまったため妖精を作ることになった。作成当初は、「サルトゲッチ」であったが、植物名を「サルトゲイバラ」と間違える人が続出したため、「サルトリッチ」とした。植物名に「サル」と入っているため、滋賀県にも多く生息している猿をイメージした。頭や背中には蔦とトゲ、尻尾には蔦と特徴的な玉ねぎ型の葉っぱをデザインした。植物のトゲの危険性を伝えることができ、活動中の怪我の減少につながった。

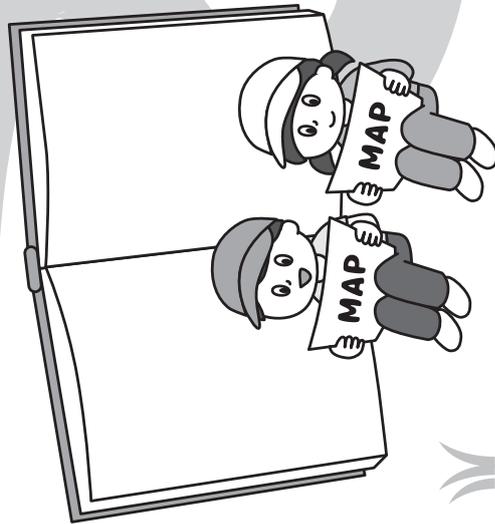


○毎朝、ストーリーを通して1日の目標を提示

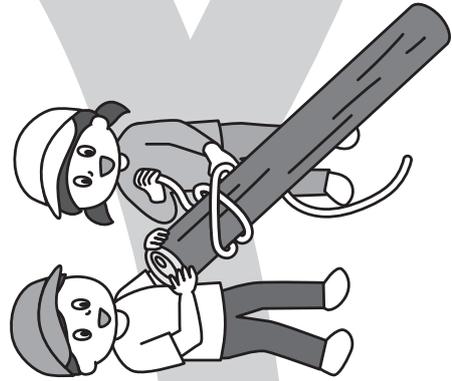
○本のページが復活するという
見える成果があったことで…



子どもたちの印象に
残りやすい



○妖精や生き物が
出てきたことで…



見える成果!!

- 達成感
- 活動への意欲

- 協力の姿勢
- 思いやり
- 活動への意欲
- 生き物や自然への
関心・知識
- 積極性

様々な
力が向上!

◎スケジュール

本キャンプのあらすじ

秘密の地図をもとに探検していたわんぱくキッズ。たどり着いたのは妖精さんたちの家だった。妖精さんが大切な本を見せてくれようとする、本の中が真っ白になっていた！？わんぱくキッズが力を合わせて本を完成させることに！！

事前説明会 7月27日(日)

◎ネームづくり

ネームづくりでは、6泊7日を通して使用するネームを作成する。ガスバーナーやブラシなどを使用し、CLの指導のもと、子どもたち自身で制作した。

MLGs：間伐材を使用し、焼杉を行った。間伐材とは森の中で木が密集しているところの木を切ることであり、より多くの木に光を届けるために必要なことであることを伝えた。また、間伐した木も有効活用して無駄にならないことも伝えた。



◎アイスブレイク

「ウソかホントか」では、班の仲間の自己紹介を聞き、仲間やCLとのコミュニケーションを取り合った。自己紹介する人が嘘をついているかどうか判断することによって、その人の興味関心を抱く結果となった。

「仲間探し」では、班だけでなく全体の一体感を上げることを目的とした。自分の班だけでなく、他の班の子どもと関わる様子が見られた。

◎防災食にふれる

メスティンを使い災害時の調理を体験した。食材も冷蔵保存を必要とするものを極力使わず、常温で保存できるものを使った。常温保存の食材のみでも調理ができることを知った。

◎サイトの地図作り

子どもたちが2つのサイトに分かれて6泊7日過ごす場所について知るために各班単位で活動しながら個人でキャンプサイトの地図作りを行った。地図作りを行うことで普段は気づけない細かなことも観察することができた。キャンプサイトについて詳しくなることで、子どもたち自ら活動するという「主体」を育むことを目指した。



本日程1日目 8月10日(日)

◎ロープワーク

ロープワークの基本の結び方として、「本結び」「巻結び」「はさみ縛り」「角縛り」の4つの結び方を学び、ランタン台を作成した。また、3日目の食材調達戦の立ちかまど作成にむけての練習として行った。CLから教えるだけでなく、子どもたち同士で教え合うことで「積極性」や「交友・協調」を培い、間伐材を使用することで「自然への関心」を向けることができた。



◎KYT (危険予知トレーニング)

野外調理を行うときに危険だとされる場面をCLが演じ、決められた時間内で子どもたちが危険な場面はどこかを探した。



そして、班の中で危険だと感じた場所について1人1人発表を行い、どうすれば安全に活動できるかを考えた。その後、考えたことを全体で共有した。調理中の危険だとされる行動や状況を事前に知っておくことで、実際に調理を行う際に気をつけなければいけないという注意力が身についた。また、子どもたち同士で危険な行動を注意できるようになっていた。

《1日目の活動の様子》



野外調理



わんぱくタイム(絵日記記入)



◎ハイキング

本来は片道30分程かけて奥鳴谷広場に行く予定だったが、前日からの雨により地盤が緩んでいる等の点から急遽別ルートに変更した。5日目に予定されている登山の準備として歩くことに慣れることを目的とした。ハイキング序盤では「しんどい」等の声も聞こえてきたが、子ども同士で声を掛け合って頑張っている様子が見られた。歩ききった後の子どもの顔を見ると達成感と自信がついた顔になっていた。

MLGs：ハイキングの道中で各班のモチーフの木を発見するという視覚や、昆虫・風で揺れる葉の音といった自然の音に耳をたてるという聴覚を活用することで自然との関わりをより深く自覚することにつながった。また、天候が雨ということもあり、普段とは違う活動フィールドを感じることができた。

◎キャンプファイアー

新しい自分への気づきをテーマにして4つのゲームに取り組んだ。

C Lからの掛け声に対して声を合わせて返事をしたり、みんなで息を合わせて同じ動きをしたりするなど全体で力を合わせて活動することができた。



MLGs：ローインパクトとして地面にレンガを敷いて火が直接土に触れないようにすることで、土の中に住んでいる微生物への負担を減らし、自然を守ることにつながる



ローインパクト (薪あり)



ローインパクト

◎運動会（食材調達戦）

実施種目：満水リレー／立ちかまどチャレンジ

夕食の調理で使う食材をかけて班で協力して解決する種目を2つ実施した。子どもたちは欲しい食材を手に入れるために自分たちで勝つためにはどうしたら良いか考え、主体的に活動する姿が見られた。また、自分たちの班が終わっても他の班の応援をする様子も見られた。順位発表の際には勝ち負けに関わらず大きな拍手が聞こえてきた。



MLGs：満水リレーでは水の大切さに気付くことができた。水が限られているものだということが目に見えて分かったので、この日以降の活動で子どもたちが節水している様子が見られた。立ちかまどチャレンジでは、間伐材の形が1本1本違うということに面白さを感じることもできた。

◎ネイチャーゲーム（居眠りおじさん）

自然の音を聞くことを目的として「居眠りおじさん」を行った。おじさん役は目隠しをしているため、風の音や他の子どもが草を踏む音など普段は意識することのない自然を知ることができた。



どろぼう役は、音を立てないように足元をよく見ることにより、活動フィールドの自然を感じることもできた。また、班によって様々な作戦を立ててゲームをクリアしようとする様子が見られ、活発に話し合いが行われていた。

MLGs：自然の音を聞くことで、山や森には多くの生き物が住んでいることを再認識することができた。足元をよく見て、地面を踏むとどのような音がするかを想像し、楽しんで活動していた。

◎チャレンジクッキング

調理を開始する前に、運動会（食材調達戦）で獲得した食材で何を作るかを班で相談する時間を設けた。今までの調理の経験から調理の手順や必要な調理器具を考え、子どもたちの自主性のもと調理の進行をすることができていた。子どもたちも自分たちが考えたメニューの形が見えてくると、達成感と嬉しさからか自然と笑顔があふれていた。



- 白ご飯
- 味噌汁
- ピーマンの肉詰め
- ポテトサラダ



◎琵琶湖博物館



琵琶湖博物館に向かうバスの中で、琵琶湖に関してのクイズを実施した。子ども自身が今の自分が持っている知識を確認することを目的とした。館内に入る前に琵琶湖博物館の周りを散策し、希望が丘文化公園とは違う植生を観察した。入館すると5つある展示室の回り方を子どもたちで考え、パスポートのフリーページにメモしながら琵琶湖について理解を深めた。トンネル水槽に感動しながら魚を観察し、昔の人の家に入って当時の生活を想像するなど目で見るだけでなく、五感を使って体験していた。琵琶湖の歴史や人々の暮らしを学び、希望が丘文化公園では意識しづらい琵琶湖とのつながりを身近に感じることができた。帰りのバスの中では、印象に残ったこと、初めて知ったこと、みんなにも知ってほしいことを発表し、交流した。



◎地産地消の体験 ～地元で生産された食材と触れ合う～

琵琶湖博物館の帰り道に守山市にある『おうみんち』(道の駅) に立ち寄った。『おうみんち』に着くまでにバスでリーダーから地産地消についてお話をした。『おうみんち』には地元の農家の方が作った野菜や総菜があり、子ども達はそれぞれ班で選んだ食材を受け取った。子ども達はリーダーと共に食材を探しながら、他の食材にも興味を持ちながら地元滋賀の食材を知ることができた。そして、希望が丘に戻って地元食材を使ってそれぞれ班で調理をして地産地消を体験した。

◎段ボールオープン作り

捨てられる予定だった段ボールを手作りのオープンに再利用した。オープンの制作を始めたとき子どもたちの中から「段ボールでオープンが作れるの？」など疑問の声が多く聞かれた。子どもが役割分担をして制作している様子がみられた。また、のりやテープ類の無駄遣いをなくそうという声掛けも子どもたちから聞こえてきた。ものを大切にしようとする姿勢を感じることができた。



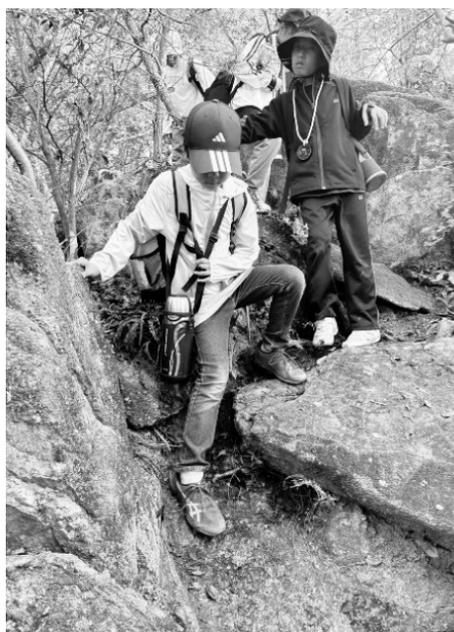
◎鮎の塩焼き

生きている鮎をつかみ取りした。鮎の表面のぬめりをとって内臓を抜くなど下処理を行うことで命をいただいていることを実感した。最初は鮎を調理することを怖がっていた子どももいたが、苦手な子に対してできる子がサポートしている様子が見られた。鮎に串を刺す工程では、子どもから「ごめんね」「ありがとう」という発言が聞こえた。魚を食べることが苦手な子どももいたが「大事な命だから。」と頑張って食べることができていた。食べ終わるころには命の大切さと感謝の気持ちを持つことができていた。

本日程5日目 8月14日(木)

◎ハイキング（登山）

早朝から鏡山ハイキングを行った。子どもたちの活動の様子から体力に応じて3つのパーティーに分かれて、子どもたちのペースで登れるようにした。そのため、普段は関わることのない違う班の子どもたちと関わる機会ができ、談笑する様子が見られた。「頑張ろう。」「もうちょっと。」などといった声掛けも子ども同士でみられた。難しいことも協力すれば乗り越えることができるということを理解できた。ハイキングから帰ってきた子どもたちの顔は達成感で満たされており挑戦することの楽しさを感じた。



MLGs：道中にリョウブやイロハモミジなどの「木の妖精の看板」を設置していた。木の妖精を探しつつ、森の植生に目を向けることができた。また、分水嶺の付近を通るときにはCLから集水域についての説明をすることで、森の役割を理解するきっかけとした。さらに早朝に登山を実施したため、日中の活動では見ることが少ない虫や聞こえない鳥の鳴き声を発見することができた。早朝でしか感じるることのできない冷たい森とふれあい子どもたちは好奇心でいっぱいだった。



◎染め物

廃棄する予定だった玉ねぎの皮を煮出して染液を作り、各班のシンボルである旗を染めた。子どもたちは布を輪ゴムやひもで縛って模様を工夫し、染まっていく様子を楽しむことができた。煮出しから染色、洗い、乾燥までのすべての工程を自分たちで行い、世界に一つだけの旗を完成させることができた。今回の体験では、普段は廃棄してしまう玉ねぎの皮も活用できることを知り、自然の素材や身近な資源を大切に育まれた。「ほかにも再利用できるものはないかな」などの声も聞かれ、廃棄物の削減について考えることができた。

MLGs：5日間の調理の中で使った玉ねぎの皮を集めるという作業は、廃棄物を減らすという意識が子どもたちに芽生えていた。また、可食部と廃棄部分の境界を考えるきっかけとなり、食材を無駄なく使うことができた。



本日程6日目 8月15日(金)

◎キャンドル作り

普段は廃棄するツナ缶の汁(油)を利用した。そのままツナ缶の汁(油)を排水溝に流してしまうと、環境汚染や排水管の詰まり、さらには悪臭の原因となってしまう。そのため、本プログラムでは環境への負担を減らすだけでなく、新たな活用ができるという発見につながった。作ったキャンドルは、6日目夜に実施したキャンドルセレモニーで使用し、活動を通して自分たちの成果を感じることができた。そのため、自分たちの生活や環境とのつながりを意識する機会となった。

MLGs：自分たちの生活の身近にある排水溝などが琵琶湖につながっていることを知った。このことに関連して食器を洗う際に洗剤を使いすぎると環境汚染の原因となることに気づくことができ、調理のときに気を付けている様子が見られた。



◎LNP (ラストナイトパーティー)*1

子どもたちがCLのサポートなしで、自分たちの力だけで調理に挑戦した。これまでの6日間で学んできた調理器具の作り方や調理方法をもとに協力して合計10品を完成させることができた。指示を待つのではなく、自ら考え、行動し、調理を進める姿勢は「主体性」の実践そのものであり、「自分たちの力でやり遂げたい。」という意欲が育まれていた。また、状況に応じて役割分担や作業の順序を判断することで、論理的思考力や問題解決力が養われた。さらに、自分たちだけで調理をやり遂げた経験は、子どもたちに大きな自信を与え、今後の挑戦への意欲にもつながっていた。そして、失敗や工夫を共有しながら一つの料理を完成させる過程では、仲間との絆が深まり、協働する力が確実に育まれた。

◎ありがとうタイム

6日間共に過ごした仲間へ感謝を伝えた。6日間で感じた感謝の気持ちを「ありがとうカード」に手紙形式でまとめ、班の中でカードを渡し合った。普段は手紙で感謝を伝える機会は少ないと考えるが、6日間の感謝の気持ちを伝えることができた。カードを書いたり渡したりする中で、子どもたちは周りの人に支えられていることを改めて感じ、相手が喜ぶ姿を見て感謝の気持ちを伝えることの楽しさも実感した。この経験を通して、普段の生活の中でもささいな出来事に気づき、思いやりの気持ちを行動に表す大切さを学んだ。



◎キャンドルセレモニー

6日目の夜に6日間の思い出を語り合うキャンドルセレモニーを行った。キャンドルの持ち手にはアルミホイルを巻いたが、これは本キャンプで使用した段ボールオープンに貼られていたものを再利用したものである。廃棄せず、丁寧に剥がして活用したことにより、資源の有効活用と環境への配慮を実践する機会となった。キャンドルセレモニーでは、火の神から授かった火を各班に持ち帰ってそれぞれのキャンドルに灯しこれまでの楽しかったこと、大変だったことを1人ずつ話した。涙をながしている班や笑いあっている班のなどそれぞれの形で6日間のキャンプを振り返っていた。長いと思っていた6泊7日の終わりが近づいているということを実感し、「仲間と離れたくない。」など別れを惜しむ声も多く聞かれた。



本日程7日目 8月16日(土)

◎野外調理



本キャンプの野外調理では、環境への配慮と主体的に活動できるようにすることを目的としていた。水や洗剤を使いすぎないようにすることを中心に環境にやさしい活動を意識できた。また、野菜の皮など、しっかり洗えば食べられる部分は食べるなど廃棄部分の削減も学ぶことができた。

キャンプ前半の調理では、各自がやりたい作業を行っていたが、後半になると班長を中心に役割分担をしながら活動していた。また、けがをしてしまった仲間に対して「私たちがやるから待っててね。」というような一方的な配慮ではなく、「今できる作業を一緒にやろう。」といった、チームとして協力し合う形のやさしさが見られた。

◎わんぱくタイム

各日の終わりに行う「ちくさくコール」*²や「歌」*³では、全員の心が1つになり、仲間との団結力を高めることができた。

最終日のわんぱくタイムでは、仲間とサインを交換する中で7日間の思い出を語り合った。これからも記憶に残る大切な思い出を形として残すことができた。

解散直前に行った「ちくさくコール」と「歌」では、涙で声を出しづらい中で後悔しないように全力で声を出している様子が見られた。仲間との別れを惜しむ姿が印象に残っている。



<補足>

- 毎晩のグループタイムの際に「パスポート（しおり）」の絵日記を書き、1日の振り返りを行った。内容は「絵日記・頑張りたいこと・楽しかったこと」を子どもたちに記入してもらった。GLがチェックする際に写真を撮り、参加者の心情の変化が分かるようにした。
- 毎晩「みんなの制作物」に『今日できたこと』を全員分記入し貼り付け、自分や仲間のできるようになったことを可視化した。

※1：LNP（ラストナイトパーティー）

6日間で経験した野外調理の知識をもとにキャンプリーダーの手を借りることなく子どもたちだけで調理を行う。また今まで一緒に活動してきたGLへ自分たちの成長を見せる機会とする。

※2：ちくさくコール

わんぱくキャンプの伝統となっている掛け声のことで、各日の朝と夜に実施した。キャンプが後半になっていくほど迫力が増していくため、団結力を形にする手段の1つである。

※3：歌

ちくさくコール同様に団結の象徴として各日の朝と夜に行った。日を重ねるほどに息があつていき、最終日には感動で涙を流す子どもも多くいる。

【用語説明】

- CL：キャンプリーダーのこと。
- F3：チーフ、サブチーフ、フードの3つの役職をまとめた総称。
チーフ：わんぱくキャンプをまとめるCL
サブチーフ：チーフを補佐するCL
フード：7日間の食事を考えるCL
- GL：グループリーダーの略。7日間を通して子どもと関わるCLのこと。
- SS：サポートスタッフの略。キャンプを裏側から支えるCLのこと。
- カメラ係：7日間の子どもの活動の様子を撮影して記録に収めるCL。



参加したCL (F3、GL、SS)

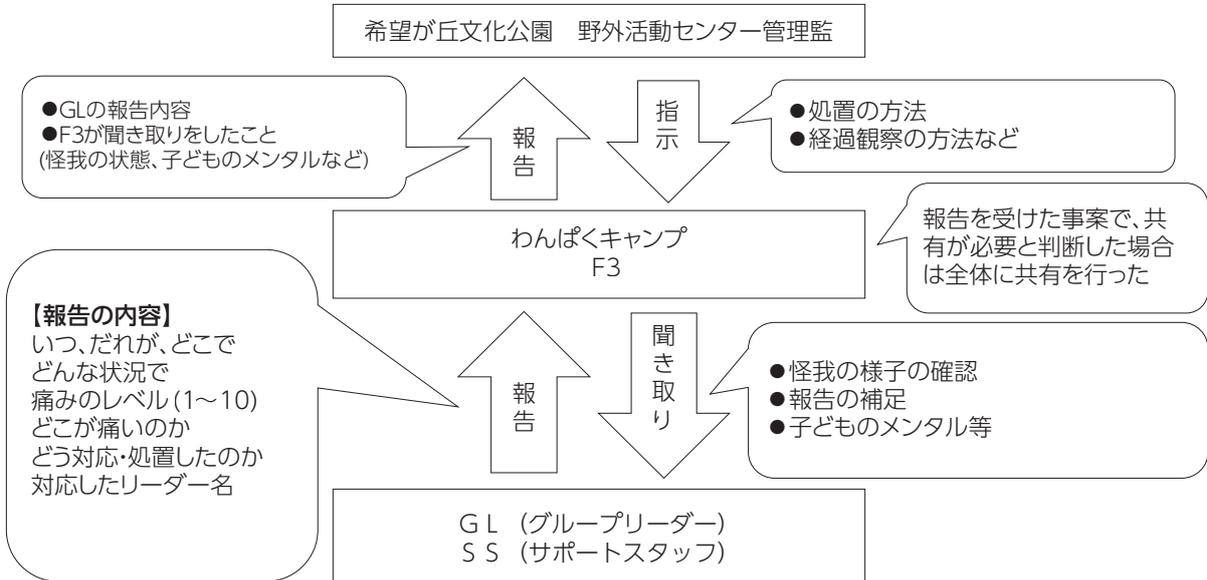


カメラ係

◎本キャンプの安全管理体制（令和7年度版）

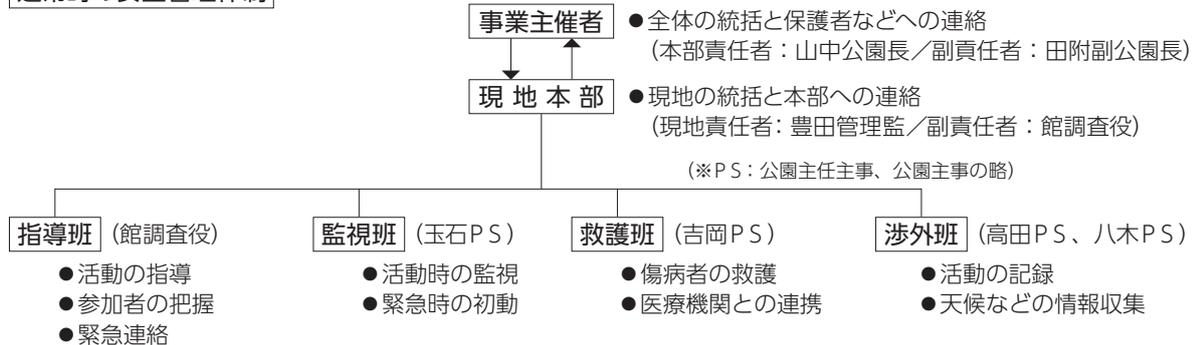
○安全管理体制（希望が丘文化公園）

公益財団法人滋賀県希望が丘文化公園希望が丘夏休みわんぱくキャンプ2025 安全管理体制(CL)

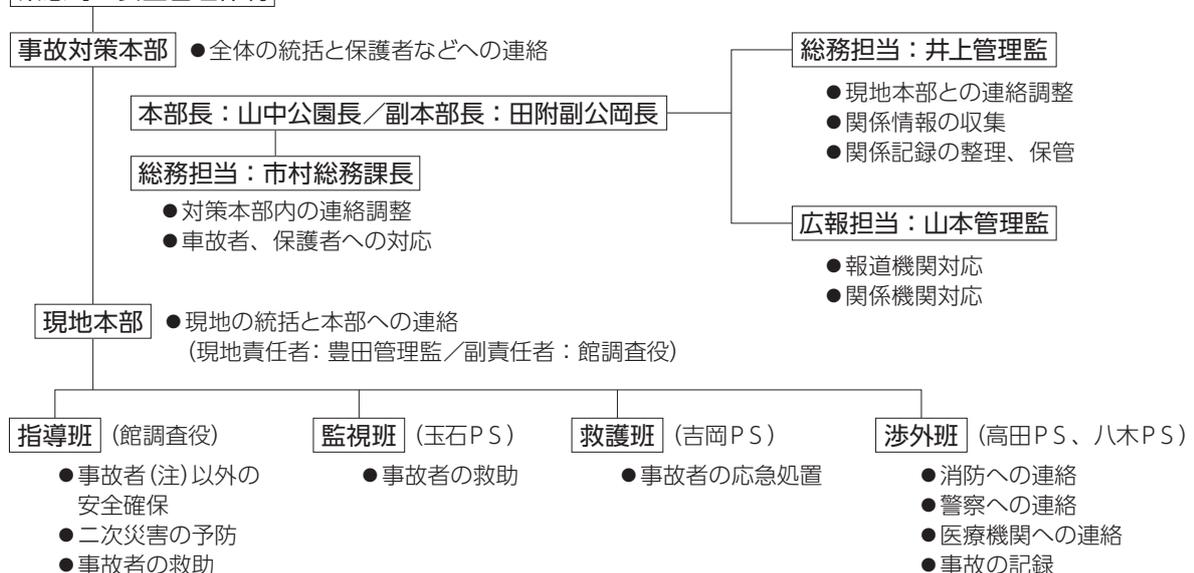


公益財団法人滋賀県希望が丘文化公園 滋賀県希望が丘野外活動センターにおける指導体制

通常時の安全管理体制



緊急時の安全管理体制



◎CL (キャンプリーダー) の対応について <文責：でんぷん>

子どもから怪我の報告を受けた際には、まず落ち着いて子どもの様子を確認し、怪我の程度を見極めた上で適切な処置を行った。その際には、安心させるために声をかけながら、痛みの有無や出血の状態などを丁寧に確認することを意識した。応急処置後には、F3に怪我の報告を行い、報告内容として「いつ」「だれが」「どこで」「どんな状況で」「痛みのレベル(1~10)」「どこが痛いのか」「どのように対応・処置を行ったのか」「対応したリーダー名」を伝えた。

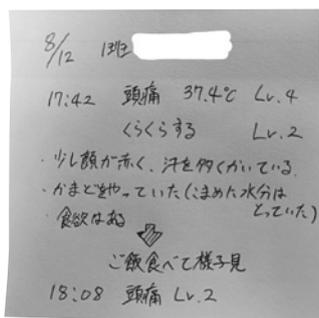
F3は報告を受けた後、実際に現場へ赴き、子どもの状態を直接確認した。さらに、子どもの口から「何があったのか。」「どんな状況で起きたのか。」を丁寧に聞き取り、希望が丘文化公園の担当職員へ報告を行った。そのうえで、今後の対応や注意点について指示を受け、全体で共有する体制が取られた。

CLからの怪我の報告をF3に集約することで、怪我の発生状況を全員が把握できるようになり、同様の事案が再び起こらないよう注意喚起を行うことができた。この仕組みによって、「どの面で怪我が起きやすいのか。」「どんな点に気をつけるべきか。」を全体で共有することができ、安全面への意識が一段と高まったと感じている。特にキャンプ初日は、調理活動中に包丁や火を扱う際の不注意による軽い怪我が多く見られた。しかし日を追うごとに、子どもたちが「次は気をつけよう。」「こうしたら安全だよ。」と互いに声をかけ合う姿が増え、最終日には怪我の報告件数が明らかに減少していた。こうした変化からも、子どもたち自身の成長と安全意識の高まりを強く感じた。

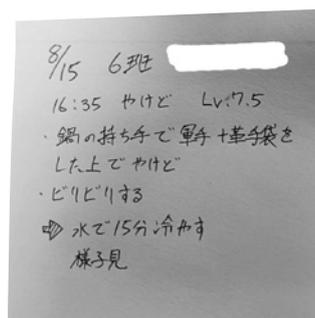
また、6泊7日のキャンプ期間中には、「家に帰りたい。」と口にする子どもが数人いた。慣れない環境の中での長期宿泊に不安を感じたり、家族が恋しくなったりするのは自然なことだと感じた。そんなとき、CLは子どもの気持ちを否定せず、「帰りたい理由」や「不安に思っていること」を丁寧に聞き取り、親身に寄り添った。そのうえで、「帰りたいね。でも、△△は楽しかったよね。□□も面白かったよね。」と、これまでの楽しい経験を一緒に振り返る声かけを行った。こうした関わりを通して、子どもたちは少しずつ気持ちを立て直し、「もう少し頑張ってみる。」「次の活動はやってみたい。」と前向きな言葉を口にするようになっていった。

長期間にわたって同じCLと過ごす中で、子どもたちとの間には次第に信頼関係が築かれていった。キャンプの初めは、体調が悪くても我慢して隠していた子どもが多かったが、中盤以降になると「少し頭が痛い。」「お腹がすこし変。」と自ら申し出てくれるようになった。これは、リーダーが常に子どもたちに寄り添い、安心できる関係を築いてきた成果だと感じた。子どもが安心して本音を話せる関係性があることで、早めの対応ができ、体調悪化の防止にもつながった。

このキャンプを通して、改めて「リーダーと子どもたちの信頼関係」が安全な活動運営の基盤であることを実感した。子どもが安心して自分の気持ちや体の状態を伝えられる関係をつくることで、怪我や体調不良を防ぐだけでなく、心の成長にもつながる。今後も、一人ひとりの子どもの声に耳を傾け、安心して活動できる環境づくりを大切にしていきたいと感じた。



頭痛の記入例



火傷の記入例

アンケート＜参加者&保護者同内容＞

事前

事後

参加者氏名 _____

※以下について該当するところに「○」をつけてください

学年 (小学校) : 4年生 5年生 6年生 / 性別: 男 女

アンケートの考え方

- 下の質問 (しつもん) をよく読み、「保護者からみた参加者である子ども」にあてはまるかどうか、「とてもよくあてはまる」から「まったくあてはまらない」までの6段階 (だんかい) で教えてください。
- 現在、もっともあてはまると思うところに、例 (れい) のように○印をつけてください。
- 考えすぎると答えられなくなることがあります。あまり考えすぎずに教えてください。

アンケートの結果 (けっか) と、学校の成績 (せいせき) やキャンプの指導 (しどう) はまったく関係 (かんけい) ありません。

- ひとりひとりのことを調べるのではなく、キャンプに参加 (さんか) した子どもたち全体のことを調べています。
- ひとりひとりの結果 (けっか) を発表したり、他人に言ったりすることはありません。

とてもよくあてはまる / まったくあてはまらない

↓

↓

		6	5	4	3	2	1
例	人との約束が守れる			○			
1	いやなことは、いやとはっきり言える						
2	人のために何かをしてあげるのが好きだ						
3	先を見通して、自分で計画が立てられる						
4	暑さや寒さに、まけない						
5	だれにでも話しかけることができる						
6	花や風景などの美しいものに、感動できる						
7	多くの人に好かれている						
8	人の話をきちんと聞くことができる						
9	自分のことが大好きである						
10	ナイフ・包丁などの刃物を、上手に使える						
11	自分からすすんで何でもやる						
12	いやがらずに、よく働く						
13	早寝早起きである						
14	自分かってな、わがまを言わない						
15	小さな失敗をおそれない						
16	人の心の痛みがわかる						
17	自分で問題点や課題を見つけることができる						
18	とても痛いケガをしても、がまんできる						
19	失敗しても、立ち直るのがはやい						
20	季節の変化を感じるができる						

とてもよくあてはまる / まったくあてはまらない

↓

↓

		6	5	4	3	2	1
21	だれとでも仲よくできる						
22	その場にふさわしい行動ができる						
23	だれにでも、あいさつができる						
24	洗濯機がなくても、手で洗濯できる						
25	前むきに、物事を考えられる						
26	自分に割り当てられた仕事はしっかりとやる						
27	からだを動かしても、疲れにくい						
28	お金やモノのむだ使いをしない						
		6	5	4	3	2	1
1	琵琶湖で遊ぶことが好き						
2	ごみを分別している						
3	森の木を切った後どこで使うか知っている						
4	水があることで自分たちの暮らしが豊かになると思う						
5	自然について学ぶことが好き						
6	使える資源は再利用しようと思う						
7	生き物をいじめない						
8	森の中で危険な場所を知っている						
9	滋賀の飲み水はどこから来ているかを知っている						
10	琵琶湖の魅力を知っている						
11	自然に囲まれた場所で遊ぶことが好き						
12	森にある植物をしっている						
13	間伐とは何か知っている						
14	嫌いなものも食べる						
15	琵琶湖の生き物を知っている						
16	自然から学べることはたくさんあると思う						
17	リサイクルする資源を知っている						
18	いただきます、ごちそうさまを欠かさず言う						
19	身近な自然を守りたいと思う						
20	洗い物をするときに洗剤の量を少なくする						
21	雨は生き物にとって大事だと思う						
22	キャンプをするのが好き						
23	食材を切るときに捨てる部分を少なくする						
24	生きている植物をちぎらない						
25	琵琶湖での遊び方を知っている						
26	何かを洗うとき水をだしっぱなしにしない						
27	ヨシで作られた楽器を使ったことがある						
28	木材を使って出来ているものもたくさん知っている						

アンケートはこれでおわりです。ありがとうございました。

アンケート比較

IKR 参加者

2024	月日	人数
事前調査	7月28日	55
事後調査	9月24日	55

『令和6年度 文部科学省委託「体験活動等を通じた青少年自立支援プロジェクト」
教育的効果の高い長期自然体験活動の構築・普及事業』希望が丘夏休みわんぱくキャンプ
分析方法：対応するデータのt検定 <参加者へのアンケート結果>
「IKR」の変容 & 「MLGs力」の変容

2025	月日	人数
事前調査	7月27日	44
事後調査	9月17日	44

能力	年度	事前調査		事後調査		t 値	p
		平均	標準偏差	平均	標準偏差		
I K R	令和6年度	125.19	20.383	135.81	22.052	-4.85	***
	令和7年度	126.3	20.64	131.64	20.95	-1.819	n.s.
心理的社会的能力	令和6年度	61.87	11.27	66.98	12.054	-4.018	***
	令和7年度	61.59	11.37	65.48	10.12	-2.543	*
非依存	令和6年度	8.7	2.08	9.35	2.208	-2.673	*
	令和7年度	8.61	2.39	9.34	1.83	-2.903	**
積極性	令和6年度	8.93	2.091	9.54	1.798	-2.354	*
	令和7年度	8.82	2.11	9.2	1.98	-0.942	n.s.
明朗性	令和6年度	8.91	2.497	9.63	2.429	-2.392	*
	令和7年度	8.95	2.37	9.41	1.74	-1.454	n.s.
交友・協調	令和6年度	8.98	2.097	9.59	2.399	-2.354	*
	令和7年度	8.91	1.93	9.3	1.64	-1.544	n.s.
現実肯定	令和6年度	8.7	2.142	9.74	2.039	-4.472	***
	令和7年度	9.27	1.99	9.8	1.64	-2.309	*
視野・判断	令和6年度	8.26	2.13	9.06	2.244	-2.854	**
	令和7年度	8.05	2.27	9	2.07	-2.762	**
適応行動	令和6年度	9.39	1.709	10.07	1.789	-2.782	**
	令和7年度	8.98	2.1	9.43	2	-1.666	n.s.
徳育的能力	令和6年度	38.19	6.259	40.76	6.625	-3.697	**
	令和7年度	37.82	6.39	38.27	6.82	-0.51	n.s.
自己規制	令和6年度	9.37	2.333	10.15	1.956	-2.724	**
	令和7年度	8.84	2.36	9.39	2.08	-1.815	n.s.
自然への関心	令和6年度	9.09	2.467	9.98	2.544	-4.353	***
	令和7年度	9.52	2.46	9.7	2.18	-0.667	n.s.
まじめ勤勉	令和6年度	10.09	1.628	10.3	1.91	-0.737	n.s.
	令和7年度	9.7	2.03	9.64	2.04	0.203	n.s.
思いやり	令和6年度	9.63	1.815	10.33	1.893	-3.286	**
	令和7年度	9.75	1.93	9.55	1.99	0.728	n.s.
身体的能力	令和6年度	25.13	5.65	28.07	5.847	-5.03	***
	令和7年度	26.89	5.53	27.89	5.42	-1.274	n.s.
日常的行動	令和6年度	7.96	2.441	8.91	2.497	-3.565	**
	令和7年度	8.34	2.61	8.82	2.5	-1.626	n.s.
身体的耐性	令和6年度	8.37	2.644	8.8	2.844	-1.399	n.s.
	令和7年度	9.14	2.4	9.18	2.24	-0.159	n.s.
野外技術・生活	令和6年度	8.8	2.004	10.37	1.73	-6.058	***
	令和7年度	9.41	1.8	9.89	1.63	-1.487	n.s.

***p<0.001 **p<0.01 *p<0.05

能力	年度	事前調査		事後調査		t 値	p
		平均	標準偏差	平均	標準偏差		
MLGsの力	令和6年度	134.74	18.957	152.92	13.63	-10.2	***
	令和7年度	140.08	17.583	147.84	15.361	-7.763	**
多様な生き物を守ろう	令和6年度	32.58	5.914	36.68	4.233	-6.644	***
	令和7年度	33.84	5.263	36.26	4.247	-2.421	*
水辺も湖底も美しく	令和6年度	34.26	4.892	37.94	3.963	-6.611	***
	令和7年度	35.08	4.744	36.61	4.044	-1.526	n.s.
恵み豊かな水源の森を守ろう	令和6年度	35.98	4.589	39.38	3.277	-7.287	***
	令和7年度	36.97	3.795	38.26	3.674	-1.29	n.s.
地元も流域も学びの場に	令和6年度	31.91	6.374	38.92	3.872	-9.18	***
	令和7年度	34.18	5.853	36.71	5.271	-2.526	**

t 値とは：統計的仮説検定において、サンプルデータが仮説の下でどの程度極端であるかを示す値。統計的仮説検定で使用される重要な統計量で主に、平均値の差が統計的に有意かどうかを検定するために使用

P 値とは：統計的仮説検定において、観測データが無作為な変動によって生じたものであると仮定した場合、そのデータがどれだけ極端であるかを示す指標。無差仮説が真であると仮定したときに、観測データまたはそれ以上に極端なデータが観測される確率を表す。p 値が小さいほど、無差仮説を棄却する証拠が強いことを示す

※「*」アスタリスクマーク：個数が多いほど優位性が高い

※「n. s.」Not significantの略：有意差なし

両側検定とは：無差仮説が棄却される条件が両端にある検定方法。サンプル平均が母平均と異なるかどうか、つまり差がプラスでもマイナスでも有意な差であれば検出するという考え方

希望が丘キャンプリーダーからの所見

<総括：チーフらぶ>

この6泊7日のわんぱくキャンプを通して、データではn.sと出たものが多かったが、私は子どもたち一人ひとりの心身の成長を強く感じ、大きな感動を覚えました。初めは不安そうな表情を見せていた子どもも、日を追うごとに自信をもって行動する姿が見られるようになり、仲間と協力しながら困難な活動に取り組む姿が印象的でした。また、昨年度も参加してくれていたリピーターの子どもたちを中心に、年下の子どもに声をかけたり、困っている友だちを自然に支えたりする姿が多く見られ、集団としての成長を実感しました。子どもたちが「自分のため」だけでなく「みんなのため」に考え、行動できるようになっていたことは、本キャンプの大きな成果であると感じました。さらに、子どもたちの成長と共に、キャンプリーダーの成長も垣間見えました。このことから6泊7日の長期キャンプ、わんぱくキャンプはこれからも続けていってほしいし、継承されてより良いものを作っていくって欲しいです。

各キャンプリーダーのコメント

能力	年度	事前調査		事後調査		t 値	p
		平均	標準偏差	平均	標準偏差		
I K R	令和6年度	125.19	20.383	135.81	22.052	-4.85	***
	令和7年度	126.3	20.64	131.64	20.95	-1.819	n.s.
心理的社会的能力	令和6年度	61.87	11.27	66.98	12.054	-4.018	***
	令和7年度	61.59	11.37	65.48	10.12	-2.543	*
非依存	令和6年度	8.7	2.08	9.35	2.208	-2.673	*
	令和7年度	8.61	2.39	9.34	1.83	-2.903	**

アンケート結果より、非依存」の項目では一定の向上が見られた。キャンプ生活の中では、班ごとの役割分担や話し合いを通して、自分の意見を伝えたり、自分で考えて行動したりする場面が多く設定されていた。例えば、調理や班で協力して何かを行う際、リーダーにすぐ頼るのではなく、まず班の仲間同士で解決しようとする姿が見られた。一方で、安全面や生活全体の進行についてはリーダーの関与が必要不可欠であり、子ども自身が完全に自立して判断する場面は限られていた。そのため、自立への意識は育まれたものの、大きな向上として表れるまでには至らなかったと考えられる。(あれら)

今回のアンケート結果では、非依存の項目において*1つの有意な向上が見られた。これは、子どもたちが「常に誰かに頼らないといけない」という状態から少しずつ離れ、自分で判断して行動しようとする意識が高まったことを示している。キャンプ中、リーダーが無理に活動へ参加させるのではなく、休みたい時は休んでもよいと伝え、無理し続けさせようとしないようにしたり、子どもの気持ちや行動を否定せず受け止めたりする関わりがあったことで、安心して挑戦できる環境が生まれた。その結果、子ども自身の「やってみよう」という意欲が引き出され、自分のペースで取り組む姿勢につながった可能性がある。(とんこつ)

積 極 性	令和6年度	8.93	2.091	9.54	1.798	-2.354	*
	令和7年度	8.82	2.11	9.2	1.98	-0.942	n. s.
<p>「積極性」は、平均値が8.82から9.20へとわずかに上昇したものの、有意差は認められず（n.s.）、大きな向上には至らなかった。この結果から、活動への参加意欲は一定程度見られるものの、自ら進んで挑戦する姿勢を十分に引き出すことができなかったと考えられる。その要因として、初めての環境に不安を感じ、指示を待つ姿勢が多く見られたことや、失敗を恐れて行動に移せない子どもがいたことが挙げられる。また、時間に追われる場面では、大人が先に動いてしまい、子どもが主体的に考える機会が減ってしまった可能性もある。今後は、子ども自身に選択肢を与え、「どれに挑戦するか」を自分で決められる場面を増やすことが必要である。加えて、失敗しても大丈夫だという雰囲気づくりを意識し、小さな挑戦でも積極的に認めていく関わりが大切である。こうした工夫を積み重ねることで、子どもたちの主体性と積極性をより高めていきたい。（おちょ）</p> <p>積極性の向上があまり見られなかった理由として、時間の余裕のなさや、リーダーによる声かけが多かったことが考えられる。調理の場面においては、子ども自ら調理に取り組んだり、意見を出し合ったりするなど、積極的な行動が見受けられた。しかし、調理に要する時間がプログラムの予定よりも伸びてしまうことが多々あり、他のプログラムへの影響を考え、リーダーが手助けを行う場面が見られた。</p> <p>また、段ボールオープン作りやキャンドル作りといったものづくり活動、食材調達戦やLNPなど、子どもが自ら積極的に参加できるプログラムは数多く用意されていたが、進行が予定より遅れてしまう場面が多く見られ、その結果、活動内でのリーダーによる声かけが増えてしまったと考えられる。</p> <p>以上のことから、よりゆとりをもたせた時間調整を行い、プログラムを構成することで、子どもが主体的に活動できる機会が増え、結果として積極性の向上につながると考えられる。（レーネ）</p>							
明 朗 性	令和6年度	8.91	2.497	9.63	2.429	-2.392	*
	令和7年度	8.95	2.37	9.41	1.74	-1.454	n. s.
<p>明朗性の向上が見られなかった理由として、去年から参加してくれた子どもや友達と参加してくれた子どもが多く、初対面の相手や新しい環境に対して気持ちを切り替える場面が少なかったことが挙げられる。また、各班で行う活動が多かったことから、固定の友達や仲間関係ができてしまい、新たな人間関係に前向きに関わる経験が限られていた事から明朗性の向上が感じられなかったと考える。しかし、その一方で各班での仲間意識は強く、何事にも最後まで取り組む姿勢が見られた。他には子どもの自主性を考えすぎてしまい調理工程が難しすぎることから時間に囚われてしまい失敗が続いてしまうことから失敗から成功に変化するのに時間がかかってしまった。6、7日目には子どもの成長を大いに感じる事が出来たが次回は子どもの自主性を重要視しながら成功できるタイミングを増やすプログラムを考え明朗性の向上に繋げたい。（らず）</p> <p>明朗性がn. s.であった要因として、参加児童はもともと学校等の集団生活に慣れており、日常的に友だちや大人と関わる中で、明るさや前向きさが育まれていたことが考えられる。そのため、6泊7日という長いようで短いキャンプ活動では、変化が数値として大きく表れなかった可能性がある。また、時間に余裕がなく焦る場面が多かったため、気分や感情の安定した変容まで至らなかったことも一因と考えられる。さらに、慣れていないことの連続で環境の変化が大きかったことも要因として挙げられる。（らぶ）</p>							
交 友・ 協 調	令和6年度	8.98	2.097	9.59	2.399	-2.354	*
	令和7年度	8.91	1.93	9.3	1.64	-1.544	n. s.
<p>交友・協調の部分に関して、少ししか向上が見られなかった理由として主に2つが挙げられる。1つ目は子ども達55名を6つの班に分けて7日間キャンプを行ったからである。ほとんどのプログラムが班単位で進行されていた事から、班内の協力プログラムはあったものの、他の班の子と関わったり、他の班同士で協力して行うプログラムがほとんどなかった。それによって、班内での交友や協調は深まったものの、7日間全体を通して見てみると他の班と交友があったのは5日目のハイキングのみで、常に時間に追われている様子が見られた子どもたちに他の班の子とも関わることはとても難しいと感じた。2つ目は、普段の慣れた生活環境ではなく滅多に訪れない場所で行われたからである。初日は緊張から始まり、暑さや融通のきかない環境に身体的、精神的な疲れが見受けられた。そのため、他の班の友達と交流することが億劫に感じたのではないかと考える。人と関わるにはとてもエネルギーがいるため、慣れない環境で、初めて会う個性の違う子どもたちであるため、学年や性別が同じでも関わるといふ余裕はなかったということが考えられるのではないだろうか。（るーしゅ）</p> <p>今年度は事前と比べ増加はしているものの優位性が見られる程ではないという結果になりました。昨年度と比較し、班や全体で何か1つのものを作ったり、何か大きなものをやり遂げたりといったプログラムが少なかったことが影響しているのではないかと推測します。令和6年度でいうところのオーパルであったり、秘密基地づくりであったりの代用となるプログラムがこの分野には十分に補えきれないものとなっていたと考察できます。日程の都合上なかなかそういった大掛かりなプログラムにこの交友、協調の要素を大きく取り入れるのは簡単な事ではありませんが、来年度はそれらの反省を活かし、計画を立てていきたいです。（まにまに）</p>							

現実肯定	令和6年度	8.7	2.142	9.74	2.039	-4.472	***
	令和7年度	9.27	1.99	9.8	1.64	-2.309	*
<p>現実肯定が高まった理由として、6泊7日という長期間のキャンプで、普段とは異なる慣れ親しみのない環境に身を置いたことが挙げられる。2日目には帰りたいと感じる人もいたと考えられるが、その気持ち乗り越え、現状を受け入れながら一日一日を過ごした。また、5日目の早朝登山という厳しい状況の中で頂上を目指して歩き、到達した時の景色や下山後の達成感を味わうことで、困難を乗り越えた先にある充実感を実感した。これらの経験を通して、目の前の現実を受け入れ努力する姿勢が育まれ、現実肯定が高まったと考えられる。 (らもち)</p>							
<p>わんぱくキャンプでは毎日のシャワータイムルーティーンの中にパスポートに絵日記とふりかえりを記入し、各班で発表し合う時間があった。最初は「夜ご飯のあれがめっちゃ不味でした」「今日はいろんなことをしてとてもつかれた」と短い文章で書いている子どももいたが、後半にかけて「明日はもっとこうしたい」「疲れたけれどみんなとやり切れたことが楽しかった」という言葉が増えていった。天候の関係でテント泊が中々できなかったり、時間の関係で活動内容が一部思うようにできなかったこともあったが子どもたちは自分の感情や現実を友だちといっしょにそのまま受け止め、次につながられるようになった。また振り返りを毎日する中で友だちやキャンプリーダーが最後まで話を聞いてくれる環境に安心し、できなかった経験も否定せずに語る姿が増え、自分自身や置かれている状況を認める力が育まれたことが、数値の向上につながったと考えられる。 (すふれ)</p>							
視野・判断	令和6年度	8.26	2.13	9.06	2.244	-2.854	**
	令和7年度	8.05	2.27	9	2.07	-2.762	**
<p>視野・判断の結果が向上し、回答のばらつきが減ったということには子ども同士や、リーダーとの関わりが影響していると考えた。特に6泊7日を通して初め子どもたちは、がむしゃらに調理する、リーダーになにをすればいいか聞くなどしていた。しかし、回を重ねるごとに、リーダーに聞くのではなくメニューを読み込んだり、子どもたちで計画を立てる際に多くの子どもたちが進んで参加したりしていた。子どもたちがお互いになにをすればいいか自発的に考えたことで視野・判断の向上に繋がったのではないだろうか。 (ろかぼん)</p>							
<p>前年度に引き続き、今年度も「視野・判断」の数値に向上が見られた。 今年度も数値が向上した要因として、班単位での活動が多く、自主性を大切にしたり取り組みを行ったことが挙げられる。その結果、周囲の状況を見て自分が何をすべきかを考える力が育まれたと考えられる。 特に野外調理の場面では、リーダーの介入を最小限にし、自分たちで考える時間を十分に設けたことが、視野・判断力の向上につながったと考える。 (チャーてえ)</p>							
適応行動	令和6年度	9.39	1.709	10.07	1.789	-2.782	**
	令和7年度	8.98	2.1	9.43	2	-1.666	n. s.
<p>適応行動については、アンケート結果から明確な向上が見られた。これは、集団生活を基盤とした活動環境の中で、子どもたちが自ら状況を理解し、周囲と関わりながら行動する経験を積み重ねたことが大きく影響していると考えられる。キャンプ中は、活動の進行や生活の流れに合わせて行動する必要があり、時間や役割を意識する場面が多く設定されていた。そのため、自分の思いだけで行動するのではなく、他者の動きや集団全体の様子を見て判断する力が自然と育まれたと推察される。また、年齢や性格の異なる仲間と共に過ごす中で、気持ちの切り替えや折り合いをつける経験を重ねたことも、適応行動の向上につながった要因であると考えられる。こうした日常とは異なる環境での連続した体験が、子どもたちの柔軟な行動選択や主体的な関わりを促進したといえる。 (ころも)</p>							
<p>この分野に関しては令和6年度も本年度もプログラムでこれらの向上が見込まれるというよりは7日間を通しての生活の中での向上が考えられるものとなっています。それを踏まえなぜ令和6年度と比べ増加の幅が狭まっているかの考察ですが、参加者の性格や経験等が関わってくると思われます。リーダーの主観も介入して行くのですが、全体的に令和6年度の参加者のほうが面倒見が良い高学年の参加者が多かったと実感しました。このことを踏まえて来年以降どう改善していくかですが、自主性を育むという視点ももちろん重要であり、重視していくべきですが、最低限は適応行動の観点にも目を向け、リーダーが声かけを行い、参加者の性格、経験問わずこの分野が向上していくようなキャンプを作っていくべきだと考えます。 (まにまに)</p>							

徳 育 的 能 力	令和6年度	38.19	6.259	40.76	6.625	-3.697	**
	令和7年度	37.82	6.39	38.27	6.82	-0.51	n. s.
自 己 規 制	令和6年度	9.37	2.333	10.15	1.956	-2.724	**
	令和7年度	8.84	2.36	9.39	2.08	-1.815	n. s.
<p>自己規制に関する項目では、キャンプ前の平均 8.84 からキャンプ後は 9.39 へと数値は上がっていたものの、全体として明確な向上があったとは認められない結果となった。これは、自己規制が気持ちをコントロールしたり、自分の行動を抑えたりする力であり、7日間という短い期間の体験だけでは変化が表れにくいことが一因と考えられる。また、参加した子どもたち一人ひとりの成長の段階や感じ方に違いがあり、集団として同じ方向の変化が見えにくかったことも影響したと考えられる。わんぱくキャンプでは、集団生活の中でルールを守ったり、思い通りにならない場面に向き合ったりする経験を重ねているが、こうした力は日常生活の中で繰り返し使われることで少しずつ身についていくものである。今回の結果は、大きな変化としては表れなかったものの、今後の成長につながる土台づくりの段階であったと考えられる。(しえる)</p> <p>「自己規制」の項目は n.s. という評価であった。この結果になった要因として、本事業では食品ロスを抑えようや節水を中心に伝えていた。子どもたちの様子を見てると調理の際に無駄遣いを減らそうという場面は見られた。また、昨年と同様に間伐材を中心としてプログラムを構成しており、間伐という環境に優しいサイクルは伝えていた。しかし、間伐材を使いすぎない様にする声掛けが不足していたと考える。キャンプ全体を通して、無駄遣いを抑える声掛けをすれば、改善をすることができるのではないかと考える。(でんぶん)</p>							
自 然 へ の 関 心	令和6年度	9.09	2.467	9.98	2.544	-4.353	***
	令和7年度	9.52	2.46	9.7	2.18	-0.667	n. s.
<p>自然への関心の観点では、事前調査が 9.09 であったが事後調査では 9.98 へと向上が見られた。それはやはり、希望が丘文化公園というフィールドでの活動の成果だと考える。</p> <p>希望が丘文化公園の野外活動ゾーンでの7日間の活動で、自然を感じ、自然と活動するということを繰り返し行うことで自然と見について行ったのではないかと考える。リーダーからの言葉だけでなく、彼らが自ら行動し探索することでより意識の向上に繋がっているのではと考える。キャンプ活動に参加するのが初めてであったり、わんぱくキャンプに参加するのが初めてである程、希望が丘の自然や街の中の自然というところにはなかなか目が届かない現代の中で、自然に触れ言葉だけではなく見て触って感じるという点でより身近なものになったためにこのような向上が見られたのではないかと考える。(すずろん)</p> <p>「自然への関心」という項目が「n.s.」となった原因は、事前と事後の数値の変化が小さく、キャンプ活動によるものと統計的には判断できないためだと考える。特に令和7年度は、開始前の数値が既に高く、プログラムを通じたさらなる向上が統計的に証明しづかったことが推察される。</p> <p>一方で、自然に関連する「MLG」の項目、例えば「多様な生き物を守るう」や「水源の森を守るう」には、有意な向上(*印)が見られた。これは、わんぱくキャンプにおける具体的な環境学習や体験が、子どもたちの関心を抱かせるだけでなく、特定の自然保護に対する具体的な意識を高める上で直接的な効果を発揮したと考えることができる。</p> <p>全体的に見ると、このわんぱくキャンプで参加者が元々持っていた自然への興味を、より実践的で具体的な環境保全への理解へと深化させる教育的役割を果たしていると言える。(ばたばた)</p> <p>6泊7日という長期間を通して子どもたちの自然への関心が高まった背景には、7日間にわたり自然の中で生活するという、日常から大きく離れた環境での経験があったと考えられる。普段の生活では、インターネットや電化製品、さまざまな便利なものに囲まれて過ごすことが当たり前となっており、自然の存在やその大切さを意識する機会は多くない。しかし、今回のようにそれらの便利なものがほとんどない自然環境の中で生活することで、これまで当たり前だと思っていたことを見直し、自然と向き合う時間が増えたことで、自然への関心が徐々に育まれていったのではないかと考えられる。</p> <p>また、プログラム内容においても、ハイキングや野外調理、琵琶湖博物館の見学、テント泊など、自然と直接関わる活動が数多く取り入れられていた。これらの体験を通して、子どもたちは自然の中で体を動かす楽しさや、自然の恵みを活かして生活することの大切さを実感したと考えられる。こうした日常生活では得難い多様な自然体験の積み重ねが、子どもたちの自然への興味・関心を高める要因となったといえる。(ずーちい)</p>							
ま じ め 勤 勉	令和6年度	10.09	1.628	10.3	1.91	-0.737	n. s.
	令和7年度	9.7	2.03	9.64	2.04	0.203	n. s.
<p>「まじめ勤勉」の項目において大きな向上が見られなかった要因として、体験を知識として定着させ、それを基に自ら考える機会が十分に確保されていなかったことが挙げられる。プログラム内での学びがその場限りの理解にとどまり、内省を通じて学びの深化に至っていなかった可能性がある。そこで、昨年度導入していたリーダーと同一の「丘ノート」の活用方法を再検討することも有効であると考えた。単なる活動記録にとどめるのではなく、活動の合間に「自ら問いを立てる時間」を設け、思考を促すツールとして機能させることで、今年度の課題の改善が期待されるのではないかと考える。昨年度も統計的に有意な差は確認されなかったものの、内省を意図的に促す仕組みとして一定の妥当性は有していると考えられる。体験と内省を往還させる学習過程を通じて「自ら学ぶ力」の育成を図り、結果として数値の向上につながるための工夫を今後も検討していく必要がある。(ばおばお)</p>							

<p>まじめ勤勉が n. s. であった要因として、参加児童は日常の学校生活において、学習活動や当番活動、集団行動を通して、すでに責任感や課題に取り組む姿勢を身につけていたことが考えられる。そのため、キャンプ活動においても与えられた役割や約束を守る姿は多く見られたが、6泊7日という限られた期間では、まじめに取り組む態度のさらなる向上が数値として表れにくかった可能性がある。また、活動が非日常的である分、楽しさや達成感が前面に出やすく、勤勉さの変化として評価されにくかったことも一因と考えられる。今年度は昨年度の結果を踏まえ、失敗は悪いものではなく、そこから次につなげていく過程を大切にすることを意識し、一日の最後に振り返りの時間を設けた。しかし、プログラムの時間に余裕がなく、振り返りの時間を十分に確保できなかったり、友だちと意見交換を行えなかったりしたため、十分な成果を得るまでには至らなかったと考えられる。(らぶ)</p>							
<p>まじめ勤勉において、昨年度に続き2年連続 n.s. であったことは、プログラムの時間に余裕がなかったことが大きな原因であると考えられる。今年度は昨年度の結果を踏まえ、まじめ勤勉の向上を図るため、プログラムや1日について振り返り、次につなげる時間、リフレクションの時間を設け取り組んだ。しかし、プログラムの数が多かったこと、時間にゆとりがなかったことによって、振り返りが簡略化されてしまい、振り返りの目的が十分に達成されていなかったと考える。</p> <p>また、まじめ勤勉という項目は子どもたち自身が実感しにくい部分でもあると考える。そのため、指導者側の具体的な称賛が必要となってくるのではないだろうか。子どもたちが一生懸命に取り組んでいるその姿勢を具体的に褒めることが向上につながると考えた。(みんと)</p>							
思 いや り	令和6年度	9.63	1.815	10.33	1.893	-3.286	**
	令和7年度	9.75	1.93	9.55	1.99	0.728	n. s.
<p>向上が見られたのは七日間ずっと仲間達と協力して相手の気持ちを理解して考えて物事を言う機会が多かったからだと思う。食事やお風呂、睡眠などと一緒に七日間みんな一緒のことを行うことであれやってほしい、これとってほしいといったことが分かり絆が芽生え行動に移しやすくなる。また、自然の中で過ごすことで心の平穏が得られ他者に対する理解度も深まるのではないかなと思う。</p> <p>あとは、火おこし、料理、片付けなど助け合えないといけない環境だったので助けってもらったり助けないとまずいといった経験もあって向上した。チャレンジクッキングなどの子どもたちだけで協力して料理を作り上げるところが一番向上した要因ではないかなと思う。(もなか)</p>							
<p>「思いやり」は、平均値が9.75から9.55へとわずかに低下し、有意差は認められず(n. s.)向上は見られなかった。この結果から、子どもたちの思いやりの意識は一定程度保たれているものの、キャンプを通して大きく伸ばすまでには至らなかったと考えられる。その要因として、集団生活の中で役割分担や協力場面は多く設定されていたが、活動が忙しく、他者の気持ちをじっくり振り返る時間が十分に確保できなかった可能性がある。また、仲の良い友達同士で固まりやすく、新たな関わりが生まれにくかったことも、思いやりの行動が広がりにくかった一因と考えられる。今後は、活動後に「友達のよかった行動」を共有する振り返りの時間を意図的に設定したり、班替えを行い多様な仲間と関われる工夫を取り入れたりすることが必要である。さらに、困っている友達に声をかけた場면을指導者が具体的に引き上げ、価値づけることで、思いやりの行動を自覚させていくことも重要である。こうした支援を継続することで、思いやりの意識をより高めていきたい。(おちよ)</p>							

身 体 的 能 力	令和6年度	25.13	5.65	28.07	5.847	-5.03	***
	令和7年度	26.89	5.53	27.89	5.42	-1.274	n. s.
日 常 的 行 動	令和6年度	7.96	2.441	8.91	2.497	-3.565	**
	令和7年度	8.34	2.61	8.82	2.5	-1.626	n. s.
<p>水分補給や食事の面では、夏場でも摂取しやすい食品や冷たい飲食物を取り入れるとともに、保冷剤を配布するなど、暑さに配慮した環境づくりを行っていた。こうした取り組みにより、参加者が自ら体調に気を配り、適切に行動しようとする姿勢が促されたと考えられる。その結果、日常的行動に関する項目では、事前調査に比べて事後調査で平均値が上昇し、統計的にも有意な差が認められた。これは、集団生活の中で水分補給や身の回りの行動を意識的に行う経験を重ねたことが、日常生活における基本的な行動の向上につながった可能性が考えられる。今後は、こうした行動の定着を図るとともに、参加者一人ひとりが無理なく行動できるよう、環境面での配慮をさらに工夫していく必要があると感じた。(くるん)</p>							
<p>今回のアンケート結果で日常的行動について、良い結果がえられなかった理由として、挨拶などの日常的行動についての内容が子どもたちにとって当たり前のことであることが挙げられるのではないかと考えた。</p> <p>普段から挨拶をしているからこそわんぱくキャンプの中で挨拶できるようになったなどの実感が得られにくかったと考えた。</p> <p>また、早寝早起き等もわんぱくキャンプに来たから今後も早寝早起きにつながっていくようなプログラム等はなかったことから日常的行動について数値が上がっていきなかったと考えた。(るぱー)</p>							

身体的耐性	令和6年度	8.37	2.644	8.8	2.844	-1.399	n. s.
	令和7年度	9.14	2.4	9.18	2.24	-0.159	n. s.
<p>令和7年度「希望が丘夏休みわんぱくキャンプ」では、参加者のIKRおよびMLGs力の変容を測定する中で、「身体的耐性」はn.s.となり、向上が見られなかった。その原因として、活動期間が限られており、身体的な成長や耐性の変化が数値として表れにくかったことが考えられる。また、参加者間の体力差が大きく、負荷の感じ方に個人差が生じたことも影響したと考える。一方で、登山やハイキングなど、身体的負荷を伴うプログラムは複数実施されており、挑戦的な活動を通してしんどいことを乗り越える経験を積む機会は多々あった。今後は、活動前後の振り返りを通して自らの成長を自覚させたり、段階的に負荷を高めるプログラム構成を工夫したりすることで、身体的耐性の向上に繋がれると考える。(ネモ)</p> <p>身体的耐性でn.sが出た原因として、活動の期間が短かったことが挙げられると考える。昨年度の結果を踏まえ今年度は、達成感を味わうことのできる、登山やハイキングなどのプログラムを複数企画したが、天候が悪く実施することが出来なかった。しかし、野外調理の回数は増え、身体的に負担がかかるキャンプは多く経験することができた。このことから、天候や体調、個人差の影響を受けやすい項目であることから、数値のばらつきが大きくなり、結果としてn. s.となったことも一因と考えられる。(らび)</p> <p>「身体的耐性」の項目はn.s.という評価であった。この項目の向上が見られなかった理由として、6泊7日という期間は短いのではないかと考える。本事業では、ハイキングや山登りなど身体的な負荷がかかるプログラムを実施していた。しかし、6泊7日の事業の中で実施できる回数は限られてしまう。身体的耐性を手に入れるためには、活動を長期的に継続することが必要であったため、向上が見られなかったと考える。改善の方法としては、朝に短距離のハイキングを行うなど、子どもたちが家庭に戻ったあとも継続して行える活動を実施すると良いと思う。子どもたちが体を動かすことの楽しさを知るきっかけ作りをすることが大切であると考えられる。(でんぶん)</p>							
野外技術・生活	令和6年度	8.8	2.004	10.37	1.73	-6.058	***
	令和7年度	9.41	1.8	9.89	1.63	-1.487	n. s.
<p>野外技術・生活においても、アンケート結果から高い向上が見られた。これは、知識として学ぶのではなく、実際の体験を通して技術や生活力を身につける活動が多く行われたことが要因であると考えられる。野外調理や道具の扱い、身の回りの中を自分で行う場面では、子どもたちが主体的に考え、行動することが求められた。自分の手で作業を進める中で、「できた」という実感や達成感を得る機会が多く、それが自信の向上にもつながったと推察される。また、仲間と協力しながら一つの作業をやり遂げる経験は、技術の習得だけでなく、生活の中で必要な工夫や判断力を高めることにも寄与したと考えられる。これらの実践的な活動が、野外での生活力全体の向上を後押ししたといえる。(ころも)</p> <p>野外技術・生活については、数値の向上は見られなかった。その要因として、悪天候の影響により常設テントでの宿泊機会が少なくなってしまうことが挙げられる。キャンプ活動において常設テントでの宿泊は、屋外での生活動作や環境への対応力を身につける重要な機会である。しかし、悪天候により室内での宿泊が当初の予定よりも多くなったことで、野外での生活を実践的に経験する機会が十分に確保できなかったと考えられる。今後は、天候条件を考慮しながら、短時間でも屋外での生活体験を取り入れるなど工夫を行い、野外技術・生活の向上につなげていきたい。(チャーてえ)</p> <p>多様な生き物を守ろうの観点では、主に鮎のつかみ取り、丸鶏の調理を通して、命をいただいていることを実感してもらい向上を目指した。しかし、鮎のつかみ取りをした際、鮎が弱ってしまっていたため、生きていることを感じにくくなってしまっていたと考える。また、本キャンプを進める上でのストーリーに生き物を登場させ、生き物が私たちの生活にさまざまな場面関わっていることを実感してもらおうとしたが、話を聞くだけでは実感することが難しく、身をもって体験することが必要だったのではないかと考えた。(みんと)</p>							

***p<0.001 **p<0.01 *p<0.05

昨年度の調査と比較して、今年度の「自然への関心」および「野外技術・生活」の項目において有意差が見られなかった(n.s.)要因について、実施環境およびプログラムの内容から考察する。

まずは、「野外技術・生活」に関してである。今年度は天候不順の影響を受け、当初予定していたプログラムであるテント泊が一部変更を余儀なくされた。この活動形態の変化が、「野外技術・生活」項目の有意差消失に直接的な影響を与えたと考えられる。テント泊では、生活の場を自ら構築するプロセスを通じて技術の習得を強く実感させる要素であるが、その機会が減少したことで、参加者の主観的な技術向上の自覚が統計的な有意差に至るほど得られなかったと推察される。

次は、「自然への関心」に関してである。今年度は天候不順の影響により、早朝の静寂の中で自然を観察する「朝のハイキング」や「モーニングプログラム」など、自然との直接的な相互作用を促すアクティビティが中止となった。これにより、参加者が自然と触れ合う絶対的な時間が昨年度に比べ不足したことが、数値に有意差が出なかった大きな要因であると考えられる。またそれだけでなく、今年度は昨年度に導入していた「丘ノート」を採用しなかった。このことも、有意差が得られなかった一因として検討すべきである。昨年度はノートを通じて自ら学び、考えを整理する習慣が促されていたが、今年度はその仕組みがなかったことで、活動制限下において「自分から学ぶとする姿勢」を引き出すきっかけが不足した可能性がある。体験時間が減少した際こそ、個々の気づきを深めるための振り返りの機会が重要となるが、その補完が十分にされなかったことが、関心の向上を阻害したと推察される。

今回の結果を踏まえると、天候不順が生じた際のプログラム構成の再考が今後の課題である。単にプログラムを縮小するのではなく、いかなる条件下においても自然とのつながりを再発見できる仕組みを導入すべきである。さらに、今後は改めてノートの配布を検討するなど、自分から学ぶとする姿勢のきっかけづくりや、考えさせる機会を意図的に増やすことで、体験の質を補完し、関心の向上を図る体制を再構築していく必要がある。(ぱおぱお)

能力	年度	事前調査		事後調査		t 値	p
		平均	標準偏差	平均	標準偏差		
MLGsの力	令和6年度	134.74	18.957	152.92	13.63	-10.2	***
	令和7年度	140.08	17.583	147.84	15.361	-7.763	**
<p>MLGsの力に関して、昨年度よりは伸びが小さかったものの、数値の向上は見られる。その要因として、事前調査での数値が昨年度に比べ高かったことが挙げられる。本キャンプではリピーターの子どものも多く、昨年参加していた子どもたちは事前知識が豊富であった。そういった子どもたちにとってMLGsについて新しい取り組みは少なく、現状維持となってしまったのではないかと考える。</p> <p>また、指導者側の取り組みとしてMLGsの観点とプログラムのつながりを意識させる声掛けが少なかったことが原因であると考え。特に野外調理の際にMLGsに関する声掛けが少なかった。繰り返し言うことで子どもたちの意識にもつながったのではないかと考える。(みんと)</p> <p>「MLGsの力」の項目については、事前と事後を比較した結果、向上が見られた。このような成果が得られた要因として、各プログラムにおいて、リーダーがMLGsの考え方を適宜子どもたちに伝えていたことが大きく影響しているのではないかと考えられる。活動中には、些細なものではあるがMLGsの内容を子どもたちが意識できるよう、場面に応じた声掛けや働きかけを行っていた。その結果、子どもたちはMLGsを「学んでいる」という自覚は必ずしも強くなかったものの、協力する姿勢や主体的に行動する態度など、MLGsに基づいた行動を自然に実践できていた場面が多く見受けられた。このように、日常的な活動の中で無理なくMLGsを体験的に身に付けられたことが、事後の評価向上につながったと考えられる。(でんぶん)</p>							
多様な生き物を守ろう	令和6年度	32.58	5.914	36.68	4.233	-6.644	***
	令和7年度	33.84	5.263	36.26	4.247	-2.421	*
<p>多様な生き物を守ろうの観点では、主に鮎のつかみ取り、丸鶏の調理を通して、命をいただいていることを実感してもらい向上を目指した。しかし、鮎のつかみ取りをした際、鮎が弱ってしまっていたため、生きていることを感じにくくなってしまっていたと考える。</p> <p>また、本キャンプを進める上でのストーリーに生き物を登場させ、生き物が私たちの生活にさまざまな場面関わっていることを実感してもらおうとしたが、話を聞くだけでは実感することが難しく、身をもって体験することが必要だったのではないかと考えた。(みんと)</p> <p>今回のアンケート結果では、「多様な生き物を守ろう」の項目で*1つの有意な向上が見られた。大きな伸びではないものの、子どもたちの中に生き物や自然環境に対する意識が一定高まったことが示されている。一方で昨年度よりアスタリスクが減少した要因は明確ではないが、参加者の興味関心の違い(虫や生き物への関心の度合い)が影響した可能性も考えられる。その中でも向上が見られた背景として、琵琶湖博物館での学びや、生きたアユを捌く体験など、実際に「命」や「自然」を身近に感じられる活動があったことが大きい。体験を通して多様な生き物の大切さを実感できたことが、意識の変化につながったと考えられる。(とんこつ)</p>							
水辺も湖底も美しく	令和6年度	34.26	4.892	37.94	3.963	-6.611	***
	令和7年度	35.08	4.744	36.61	4.044	-1.526	n.s.
<p>今回は去年と異なり、実際に琵琶湖に行って五感で湖に触れる活動ではなく、琵琶湖博物館での学習を中心としたアプローチを取った。その結果、湖そのものに触れる実感が薄れ、水族館に来たような印象が強くなり、振り返りの絵本でも「チョウザメを見た」といった展示物のインパクトが先行してしまった。去年のような湖の風や水の感覚、波の感覚などの実際の琵琶湖に触れて遊んだといった思い出が主役にならなかったため、期待した評価には届かなかったと考えられる。(るぱー)</p> <p>「水辺も湖底も美しく」の項目は、n.s.という評価であった。この結果となった要因として、自分たちの活動と琵琶湖のつながりを伝えることが不足していたと考える。本事業の活動フィールドは滋賀県希望が丘文化公園であり、琵琶湖から少し離れている。そのため、自分たちの活動がどのように琵琶湖の保全につながっているのが課題であった。そのため、今年は滋賀県立琵琶湖博物館での学習を実施した。琵琶湖に関する展示が多くあり、子どもたちも多くのことを学んでいた。しかし、自分たちの活動とのつながりを見つけることは難しかった。そのため、子どもたちが自分たちと琵琶湖のつながりに気づくことができるプログラムを取り入れる必要があると考える。(でんぶん)</p>							
恵み豊かな水源の森を守ろう	令和6年度	35.98	4.589	39.38	3.277	-7.287	***
	令和7年度	36.97	3.795	38.26	3.674	-1.29	n.s.
<p>わんぱくキャンプを通じて、MLGsの1つである「恵み豊かな水源の森を守ろう」に関する子どもたちの向上はあまり見られませんでした。その要因として、主に2点が考えられます。1点目は、ツナ缶キャンドル作りや野外調理といった関連した活動を実施したものの、目標の内容を直接的に学習するものではなかったため、子どもたちが十分に認識しにくかった可能性があるということです。2点目は、間伐材の活用や資源を大切に使う意義について説明を行ったものの、子どもたちの興味関心を引き出す説明や声かけが不十分であった可能性があります。その結果、子どもたちの自ら学ぶという姿勢を引き出せず、向上につながらなかったと考えています。今後は、目標に直接関与できるプログラムの作成や、興味関心が引き出せる説明方法の改善が求められると考えます。(もっく)</p>							

	<p>豊かな水源を守ろうの項目では、強い向上が見られた。キャンプ期間中、水を出しっぱなしにしないなど水の使い方について日常的に声掛けが行われていたことに加え、バケツリレーを通して水を運ぶ大変さや水の貴重さを体験的に学ぶ機会があった。また、琵琶湖博物館の見学では、滋賀県の豊かな水環境や生態系について具体的に学び、水源を守ることが自分たちの生活と深く結びついていることを理解するきっかけとなった。これらの体験が知識と実感の両面から子どもたちの意識に働きかけ、環境を守ろうとする意識の大きな向上につながったと考えられる。(あれら)</p>							
	<p>「恵み豊かな水源の森をまもろう」の項目が n. s. となった要因は、キャンドル作りや立ちかまどなどの実施プログラムの特性と、意図した環境意識との間に「視点の相違」が生じていたことが推察される。本活動は、ツナの油を活用して水質汚染を防ぐ工夫や、地面を傷めない野外技術の実践を通して、結果的に森を守る行動に繋がるものであり、「資源の有効活用」という観点では高い教育的効果を有していた。一方で、子どもたちの関心は目の前の体験に集中し、その背景にある「森の保水機能」や「生態系保全」といった抽象的概念と体験とを結びつけられていなかったと考える。</p> <p>このことから、環境への配慮は行動として実践できていたものの、それが「森を守ること」であるという認識の言語化・定着が十分ではなかったことが示唆される。今後は、プログラム意味を、森や水の循環と関連づけて説明するプロセスを強化し、実践を環境意識へと昇華させていくべきである。(ぱおぱお)</p>							
	地元も流域も学びの場に	令和6年度	31.91	6.374	38.92	3.872	-9.18	***
		令和7年度	34.18	5.853	36.71	5.271	-2.526	**
	<p>「地元も流域も学びの場に」という項目の向上が見られたのは、琵琶湖博物館での学習体験を行ったことが大きく影響していると考えられる。</p> <p>琵琶湖博物館では、琵琶湖の自然環境や生き物、人々の暮らしとの関わりについて、展示や体験を通して学ぶことができた。実際に見て、触れて、感じる経験を重ねることで、地元や流域での出来事を自分事として捉えるようになり、学びの対象としての意識が高まったと考えられる。ファーマーズマーケットおうみんちにも行き、地産地消について学び、地元でできた食材を購入する体験をした。その日の夜ご飯の調理ではあゆの塩焼きと焼きそばを作った。あゆは生きている状態から子どもたちが掴み、処理をして食材になるまでの過程を体験し、食べ物に感謝する気持ちがより強くなっていた。焼きそばで使う野菜に関してもなるべく捨てる部分のないように切る工夫が見られ、その後の調理でも食材を無駄にしない意識が続いていた。(すふれ)</p> <p>今回のアンケート調査の結果を受けて、事前調査の数値が昨年度に比べて元から高かった点に着目したいと考えた。そこで元が高い理由として2年連続の参加者がいることが原因となると考えた。前回と比べて*が2個にとどまってしまった理由としては実際に琵琶湖に出ていくのではなく、本年度は琵琶湖博物館での学びや鏡山登山後の川遊びなどを行ったこと、キャンプ全体を通して非依存を中心とした生きる力に重きを置き、子ども達を指導及びサポートした結果と考えた。(るぱー)</p>							

分析のまとめとプログラム普及に向けた具体策

これまでの分析を踏まえると、希望が丘わんぱくキャンプは、6泊7日の長期自然体験を通して、参加者の非認知能力（IKR）およびMLGs力において、総合的かつ安定した向上を示した。特に、非依存、視野・判断、現実肯定、自己規制といった「自分で考え、状況を受け止め、行動を調整する力」に顕著な成果が見られ、これは生活そのものを学びの場とする本キャンプの特性によるものである。

令和7年度は、令和6年度と比べ一部項目で統計的有意差が見られにくかったが、これは参加経験者の増加や事前段階での能力水準の高さによる天井効果の影響が大きい。数値のばらつきが縮小していることや、リーダー所見において行動の質的成長が確認されている点から、本事業は効果が低下したのではなく、「定着・深化段階」に移行していると評価できる。

MLGsの観点では、水資源の大切さや地元・流域を学びの場として捉える意識において有意な向上が見られた一方、水源の森や琵琶湖とのつながりといった抽象度の高い概念では、体験と意味づけの接続に課題が残った。行動としては実践できているものの、その意義を言語化する機会が十分でなかったことが要因と考えられる。

今後の普及に向けては、体験後に「この行動は何を守ることに繋がったのか」といった問いを用いた振り返りを導入し、体験と概念を結びつける仕組みを強化することが有効である。また、少人数・班単位での深い協働が育てる力を明確に言語化し、数値データとエピソードを併せて提示することで、学校や他地域でも理解・導入しやすいモデルとして展開していくことが求められる。

(文責：カシャボ<キャンプリーダー>)

MEMO



A series of horizontal dashed lines for writing, spanning the width of the page.



令和7年度「希望が丘夏休みわんぱくキャンプ」保護者アンケート

「希望が丘夏休みわんぱくキャンプ」にご参加いただき誠にありがとうございました。
今後の参考にさせていただきますのでご協力をお願いいたします。

※該当する箇所に○印をご記入ください

1 今回のキャンプについて当てはまるところに○をつけてください

	大変良い	良い	悪い	大変悪い
①参加させてどうでしたか？	---	---	---	---
②スタッフの印象はいかがでしたか？	---	---	---	---

2 今回のキャンプを通じて3か月後、あてはまる事柄に○をつけてください（複数回答可）

- | | |
|--|--|
| <input type="checkbox"/> 我慢強くなった | <input type="checkbox"/> 自主性や協調性が育った |
| <input type="checkbox"/> 最後まで頑張るようになった | <input type="checkbox"/> たくましくなった |
| <input type="checkbox"/> 自信がついた | <input type="checkbox"/> お手伝いをするようになった |
| <input type="checkbox"/> あいさつやお礼が言えるようになった | <input type="checkbox"/> 自然に関する意識の変化があった |
| <input type="checkbox"/> その他（ | ） |

3 今回のキャンプに対するご意見・ご感想・問題点などがあればご記入ください

ご協力ありがとうございました。
滋賀県希望が丘文化公園

アンケート結果集計

1 今回の事業について当てはまるところに○をつけてください

	大変良い	良い	悪い	大変悪い
①参加させてどうでしたか？	40	5	0	0
②スタッフの印象はいかがでしたか？	40	6	0	0

2 今回のキャンプを通じて、あてはまる事柄に○をつけてください（複数回答可）

<input type="checkbox"/> 我慢強くなった	12
<input type="checkbox"/> 最後まで頑張るようになった	11
<input type="checkbox"/> 自信がついた	28
<input type="checkbox"/> 挨拶やお礼が言えるようになった	7
<input type="checkbox"/> 自主性や協調性が育った	23
<input type="checkbox"/> たくましくなった	27
<input type="checkbox"/> お手伝いをするようになった	20
<input type="checkbox"/> 自然に関する意識の変化があった	6
<input type="checkbox"/> その他	2

3 今回のキャンプに対するご意見・ご感想・問題点などがあればご記入ください

- 親から離れるようになった、イライラしにくくなった
- 子どもたちにいろいろと経験できるようたくさん考えて準備を重ねてくださりありがとうございました。参加して大変楽しかったと言っていたので、有意義に過ごした様子で嬉しいです。DVDもありがとうございます。
- 大人も子どももいろいろな人と接することができてよい機会だと思います。テント泊が少なかったようなのでもう少しテント泊ができればよいなと思いました。3年連続で参加させてもらって本人はとても成長したなと感じました。ありがとうございました。
- 以前から家の手伝いをしたり、料理をしたことがありましたが、キャンプでの過ごし方を聞いて我が子は親が思っているよりもなんでもできるのだなと感じました。親と離れて過ごせたことで、子どもの知らなかった一面を知れましたし、成長を感じる事が出来ました。食事の量は問題がなかったのですが、味付けが濃すぎで食べ終わったら気持ち悪くなっていたと言っていました。外食やファストフードに慣れたこともあり、仕方のない所があると思いますが、もう少し加減してもらえたら嬉しいです。キャンプリーダーは参加者を楽しませるために頑張る姿をたくさん見る事ができました。参加してよかったと思います。ありがとうございました。
- テントの中の臭いがきつく、眠れなかったようです。
- 暑い中でしたのであせもができていました。できれば1日に何回かシャワーなどできるとありがたいです。
- 楽しいキャンプだったようです。運営して下さった方々に感謝です。一つ息子と話していて、思ったことがあったので記入させていただきます。5班のグループで一緒だった女兒が食材の取り分けるときにジャンケンで勝った人から自分のお皿に食材を入れるとなっていたルールで、その女兒ばかり肉つけのもの(ウインナー)をどんどん取れるので、その女兒よりあとになった子たちは、野菜ばかりになっていて、どんどん食べるものが無くなり、辛かったと言っていました。ジャンケンで勝ったものから食材をとるなら、次回の食事はその時ジャンケンで負けた者を一番に食事を取れるようにするなどしてみてはどうでしょうか？でもその女兒とどんな対応をするかを考えるチャンスにもなったと思うので良い経験だったと思っています。スタッフの方々ありがとうございました。
- 子どもがお世話になり、ありがとうございました。破格のお値段で1週間もの長期キャンプを実施して下さり、大変貴重な様々な経験から特に、精神面が鍛えられて成長させていただけたと感謝しております。また、日常から離れ、デジタルデトックスができたのも本当にありがたかったです。やはり、“生の刺激”、“リアルな体験”を重要視して、今後もぜひこのような機会があれば積極的に参加させていただきたいと思います。
- 早寝早起きが苦手な好き嫌いも多い子なので心配していましたが、なんとか一週間乗り切ったようで安心しました。キャンプの間は残さず食べたと聞いて、驚きました。もっと前からこのキャンプを知っていたらと思います。キャンプリーダーになりたいと言っています。将来が楽しみです。
- ありがとうございました。
- すばらしい時間を経験させて頂きありがとうございました。自分も、キャンプリーダーになり

たい！！と話してくれます。これからも、そんな風に継承されながら長くキャンプが続いていきますように。

- とても良かったと思います。
- 最高学年として参加することで、これまで以上に積極的に物事に参加するようになったと感じております。また、自身より小さな学年の子達に対するHELPや目上の方から自ら手伝いをするが増えました。今後もこれからの子ども達の為にもこのような活動を継続していただければと感じております。
- 毎日SNSの更新があり、安心できました。非常に良い経験ができ、参加させてよかったです。
- 2年目のわんぱくキャンプありがとうございました。参加前からとても楽しみにしていました。キャンプリーダーも素晴らしく夏のとても良い経験でした。いろんなことを通して成長できてよかったです。キャンプが終わった後、家でキャンプご飯を作ってくれました。ありがとうございました。
- 5年生、6年生と続けて参加させていただきました。今回も前回も、とても楽しかったと話してくれました。来年は中学生になるため、参加できないことを残念がっていました。キャンプを通して成長を感じたことは、とにかくたくましさを感じられるようになったことです。ありがとうございました。
- 先ずはこのような企画、運営をしてくださった関係者、スタッフの方々に御礼申し上げたいと思います。知人にキャンプの期間、内容、コストを伝えても一様に驚いていたので、貴重な機会をいただけたと感じております。やはり1週間（3、4日ではなく）という期間が心身ともに鍛えるのに一番魅力であり、重要だと思います。絆が深まった段階で行ったハイキングは、娘にとってのハイライトになっていたようでした。一週間あると、表面的な付き合いから互いの良いところ、嫌なところ、意外な一面など、次のステップのコミュニケーションに移れますし、一つの目的（食事準備中やアクティビティ）を共有することで、そういう経験を積めることは大変良い機会をいただけたと考えております。
- 以前は人間関係を避けてしまう面があったのですが、キャンプリーダーとの出会いを通して、人と出会うことのすばらしさや絆を学んだように感じます。キャンプでの思い出の歌やエピソードをよく口に、一週間という濃い時間は3か月たった今も、鮮明な記憶として残っているようです。
- わんぱく活動での活動や様々な人との交流を通して、自分からできることを探して取り組めるように（日常生活でも）なってきました。言われたことだけを手伝っていた場面でも、先を見通して、自分から主体的に関わるが多くなりました。リーダーの方たちとの思い出は色濃く心に残り、折にふれて会話の中でも登場します。大変だったことを、みんなで協力して乗り越えたという前向きな体験をさせていただけたことを大変ありがたく感じています。
- わんぱくキャンプに参加できたことで、子どもの中でたくさんの発見や学びがあったようで、帰ってきて3か月たった今もキャンプ中のエピソードを話すことがあります。特に、普段出会うことのないキャンプリーダーの方々の存在は大きかったようで、「〇〇元気にしてるかな。」「また会えるかな。」と再会を心待ちにしているようです。日頃から家事や掃除は手伝う方ですが、自分の役割として、より意識が高まっているのを感じます。キャンプでの大変さを経て、“できることは自分で”が養われたと思います。

- 普段の生活では経験できない自然の中で過ごす経験はとてもありがたいことです。前年度も参加し、子ども自身が去年の反省をふまえて今年はどうしてみようなど考えて行動しているようでした。食事の量が多いと聞くので、もう少し量を減らして作るほうが無理に食べることもなく、無駄もないのでは??と思います。
- たくさんの学びを伝えていただき感謝申し上げます
- 参加している子どもさんは良いのですが、連れてこられていた妹さんが最初の青年の城の体育館でもあちこちぐるぐる回り、親御さんは全く注意されていませんでした。最終日に迎えに行った際も、あちらこちら歩き回り、柱の上に登り、あげく歌い始めグループリーダーさんの話が全く聞こえなかったので、山のほうを差し「歌うならあっちで歌って!!」と言ったら静かになりましたが、相変わらず親御さんはスマホに夢中で全く子どもさんを見られていませんでした。親御さん自身がキャンプに参加されたほうが良いと思います。もしくは、留守番させて本人、親御さんのみにしたほうがいいのかもかもしれません。
- 体調不良もありましたが一週間丁寧に見ていただきありがとうございました。普段の生活では体験できないことを経験し、少したくましくなったように思います。料理を積極的に手伝ってくれるようになりました。
- 生活の中でキャンプの時にやったことがあるから私もできるよ!と手伝ってくれたり、自分から行動する姿が多くみられるようになりました。家で体験させてないことも経験させてもらって自信につながり、友達やリーダーと一緒にだからこそ素直に一生懸命頑張れるんだろうなと感じます。本当に感謝の感謝でいっぱいです。ありがとうございました。
- キャンプ中は皆様に生活面、健康面でご配慮いただきありがとうございました。あせもが思っていた以上にひどくご心配をおかけしました。あそこまで…とっておらず、甘く考えていました。背中に手ぬぐいをはさんだり、こまめに拭いたりといった対策を本人と話さないままキャンプに参加し、本人もよく頑張ったと思います。次回の参加についてはこの点が一番の心配点かなと感じております。入浴の機会を増やすなど家族でフォローできることも含めて何か対策があればと強く感じます。本人の様子は3か月たった今でも昨日のこのようにキャンプ中の出来事を話してくれます。メスティンを使った炊き込みご飯も家族にふるまってくれました。キャンプに参加したこの夏を境に“できないこと”、“苦手なこと”（「スイミングスクール、泳ぎ方を家で練習してみる、調べてみる」「クラスの皆にまじって昼休み自主的にドッジボールに参加する」）に向き合い、一層いきいきと生活しているように見受けられます。生まれて初めて知らない人の中で生きる経験、刺激的で鮮烈な記憶となりました。心より感謝申し上げます。
- スタッフのおかげでよい経験ができ成長できたと思います。スタッフに感謝。ありがとうございました。
- 今回は最後の参加になると本人もわかっていたので、今までより行くことに対してすごく積極的だったように感じました。参加して迎えに行ったときすごく帰りたくなさそうにしていたり、リーダーの皆様覚えてもらって声をかけてくださりとても嬉しそうでした。帰りの車の中で今までで一番しゃべっていました。何が楽しかった、こんなことがあった、3日目ぐらいに夜寝られなくてリーダーとおしゃべりしたなど、とてもたくさんのことを話してくれました。それだけですばらしい体験をしてきたんやな、ちゃんと楽しめたんやなと思い、行ってよかったなと思っています。大変なこともたくさんあると思いますが、これからもこのような体験がで

きる事業を続けてほしいと思っています。本当にありがとうございました。リーダーの皆様すてきな思い出ありがとうございました。

- 誰かに言われて動くのではなく、自分で考え、今何をすれば周りの助けになるかということを考えられるようになったのでとてもありがたく思います。
- 初めての環境や人に対して緊張しやすく、苦手意識がありますが、キャンプを通して、グループで話したり、役割を決めたり、活動することで、自信につながったように感じます。自分の性格を捉えながらも「やってみよう」と思う気持ちが出てきたように思います。貴重な体験をありがとうございました。
- ほとんど自分で料理することによってキャンプを終えた息子が「お母さん、ご飯作るのって大変やな〜」と言った言葉で、キャンプでいろんなことを思い学んだんだと実感しました。ありがとうございました。天気がよくなってテント泊が減ったのが残念だった。インスタで写真を見たが、予定変更の詳細などをメールか何かで確認できるようにしてほしいです。なかなかこのような長期でのキャンプではないので、ぜひ続けていただきたいです！いい経験をさせていただきありがとうございました。アンケートでいただいたDVDが見れない。基本何で見れるのか教えてほしいです。家のブルーレイレコーダーで見ようとしています。
- 今回キャンプに参加させてもらい、ありがとうございました。子どもにとってこの6泊7日のキャンプを過ごせたことは楽しく有意義な時間でした。このキャンプを通して、最後までやり切ることができたこと、いろいろな方を関わり過ごせたこと、いろいろなことを学ぶことができ、自信につながったと思います。今回キャンプに関わっていただいた多くの皆様に感謝いたします。本当にありがとうございました。キャンプリーダーの方には6泊7日という長い時間を子どもたちのためにつけていただき、子どもがとても楽しく過ごすことができました。ありがとうございました。
- 子ども自身帰ってきたとき、「めっちゃ楽しかった」「友達とまた遊びたい」「リーダーさんがやさしかった」などとマイナスの部分を持っているのは1つもなくて全部プラスの言葉でした。家に帰ってきたときはとても成長したなと思いました。去年も楽しかったし、今年も楽しかったと言っている子どもの笑顔が大好きです。来年も都合がなければキャンプを優先しようと思います。希望が丘文化公園のみなさま、リーダーの皆様、うちの子どもと仲良くしてくださって本当にありがとうございます。来年もできたらいこうと思っています。
- 今後も継続していただくと大変うれしく思います。
- 洗濯物をキャンプ中に受け取りに行ったのですが、受け取って持って帰ってきてみると、洗濯物の中に未使用の衣類と折りたたみ傘とレジャーシートと雨がっぱが入っていました…(笑)(次の日も雨でした)大前提として本人の不注意なのですが、可能であれば受け取りの際に中身を確認させてもらえるとありがたいなと思いました。(車で受け取りなので確認する余裕がありませんでした。)とはいえ、すでにお時間をさいて頂いているのでまあこれはこれでいい思い出かなと思います！

◎MLGsの取り組み

本キャンプでは環境保全および持続可能な社会の構築という観点から、国際的に広く共有されているSDGsの理念を踏まえつつ、地域性を考慮して滋賀県独自に策定されたMLGs（滋賀県版SDGs）の枠組みに基づき、特にその中から4つの重点項目を抽出し、計画的かつ実践的に取り入れた。

<着目したMLGsの4つの項目>

- 多様な生き物を守ろう
- 水辺も湖底も美しく
- 恵み豊かな水源の森を守ろう
- 地元も流域も学びの場に

多くのプログラムに子どもたちが間伐材と触れ合う機会を設け、森林の大切さや間伐の必要性を伝えた。ハイキング中などに子どもたちから「これは間伐？」などの発言が聞かれたことから活動に効果があったと考える。また野外調理の際には、節水をすることを伝えたり洗剤の使用を少なくしたりすることを伝えた。特に子どもたちが驚いていたことは、食材の無駄を少なくするということだ。野菜の皮なども食べるのできるものがあることや、へたなどを切るときも「できるだけ捨てる部分は少なく切ろうね。」など子どもたち自身で考えることができるよう声掛けを行った。最終日の野外調理の場面では、子どもたちの方から「玉ねぎの皮は集めるの？」や「水の使いすぎじゃない？」など環境に配慮した言葉が聞かれた。子どもたちにMLGsに基づいた環境保全を感じてもらうことができたと思う。

◎MLGsとIKRの関係についての考察

－ IKRの視点より －

IKR 指標	得られたと考える効果
非依存	野外調理で、リーダーに言われることなく「水の無駄遣いをしない。」「食材の食べられる部分を残す。」などを子どもが行うことで、『04 水辺も湖底も美しく』『05 恵み豊かな水源の森を守ろう』を達成することができた。
積極性	ハイキングで、自分の班のモチーフの木を自ら進んで探すことで、周囲を見渡すことに繋がり、色んな生き物を発見した。そして、リーダーに疑問点を聞くことで、自然に対する学びを得た。これにより、『03 多様な生き物を守ろう』『10 地元も流域も学びの場に』を達成することができた。
明朗性	人が明るく前向きであると、自己中心的になりにくく、周りの人や自然に対して思いやりの気持ちが生まれやすい。こうした気持ちは、生き物を大切に意識につながる。また、明るい雰囲気は行動にも影響を与える。仲間と一緒に楽しい気持ちで活動することで、ごみを拾ったり、生き物を傷つけないように気をつけたり、自然を観察して楽しむといった行動が自然にできる。さらに、明るさは協力を生み、対立を減らすため、みんなで自然を守る活動を進めやすくする。だから、私たちが明るくなることは、周りや自然に配慮する心を育てるため『03 多様な生き物を守る』につながる。

IKR 指標	得られたと考える効果
交友・協調	食材調達戦での満水リレーにて、水をこぼさないように声を掛け合い協力したことで、水は限られた資源であることを学んだ。これにより、『04 水辺も湖底も美しく』『05 恵み豊かな水源の森を守ろう』を達成することができた。
現実肯定	雨が降ることが多く予定通りの活動ができなかったが、「雨だからこそ普段と違うところを探してみよ。」「雨だから涼しくて気持ちいいね。」という声が聞こえた。これにより、天候の変化等で思い通りにいかなかったことが多々あったが「どうしよう?」と考える力がついた。このことから、『10 地元も流域も学びの場に』を達成することができた。
視野・判断	普段の生活では気づかない虫や植物の役割を学ぶことや、調理の際に地面に落ちている生ごみに気づき、そのまま捨てるのではなく生ごみと砂をしっかり分別してからごみ箱に捨てていた。このことから、『03 多様な生き物を守ろう』『04 水辺も湖底も美しく』『05 恵み豊かな水源の森を守ろう』を達成できた。
適応行動	テント泊が最初は嫌だと言っていた子も4日目になると、「テントの方が虫の音よく聞こえるからテントで寝たい。」というようになった。また、ハイキングやネイチャーゲームで自然の音を聞くことで、『10 地元も流域も学びの場に』を達成することができた。
自己規制	一人でいるのが好きと言っていた子もグループで活動する場ということを理解し、仲間と協力することができた。また、前半は「もっと遊びたい。」という気持ちだったが、後半にかけて「知りたい」という気持ちへと変化していった。これらから『10 地元も流域も学びの場に』を達成できた。
自然への関心	みんなの制作物で、毎日見つけた自然や虫についてを紙に書くことで、子どもたちの生き物についての興味や関心を深めることができた。これにより、『03 多様な生き物を守ろう』を達成することができた。
まじめ勤勉	琵琶湖博物館に行き、地元について学ぶ機会を設けた。ただ見るだけでなく、真剣にメモをとったり質問をして学ぶ姿勢が見られた。また、ハイキングに行ったときに、「ここは〇〇川と〇〇川の分水嶺なんだよ。」と教えてあげることで『10 地元も流域も学びの場に』が達成できた。
思いやり	食べ物の無駄遣いをしないとともに、虫など生き物を殺さないようにしていた。また、好きな食材だけでなく、嫌いな食材も食べられるように工夫していた。このことから『03 多様な生き物を守ろう』を達成できた。
日常的行動	日常的に「いただきます」「ごちそうさま」を言うことを意識していたのと、朝起きたらこれをやるや、お風呂待っている時はこれをやるというのをルーティーン化することで自分たちで考えて動くことができた。このことから『10 地元も流域も学びの場に』が達成できた。

IKR 指標	得られたと考える効果
身体的耐性	7日間の活動では、「暑い」と訴える姿もあった。配布された保冷剤を活用したり、タオルを濡らしたり、日陰を選んで休憩したりと、自分で工夫しながら体調を整えていた。水分補給については、初日のみリーダーが声をかけ、その後は子ども同士で自然に声を掛け合うようになり、互いを思いやる雰囲気が出来ていた。また、Tくんは小ハイキングでは疲れを口にする場面があったが、本番の登山では仲間の応援やリーダーの励ましを受け、体調不良ながらも頂上付近まで登りきることができた。こうした経験を通して、子どもたちは自然の中で自分の体調を管理する力や、仲間と支え合いながら挑戦する姿勢を育んでいた。この体験を通して、地域や自然そのものを『10 地元も流域も学びの場に』として捉える姿勢が培われていた。
野外技術・生活	間伐材を利用して野外調理を行うことで森のありがたみを知り、森を大切にすることを育んだ。このことから『05 恵み豊かな水源の森を守ろう』を達成することが出来た。

【IKR調査項目】



－ MLGsの視点より －

MLGs 項目	得られたと考える効果	IKR 指標
03. 多様な 生き物を 守ろう	7日間を通して自然にたくさん触れ、過ごしたことで適応行動が向上し、これにより自然への関心が高まった。生き物がどのようなところで過ごしているか、どのような特性を持っているかなど生き物を守るために必要な知識を知ることができた。他にも、思いやりや交友・協調、積極性や自己規制といった子どもたち同士やリーダーとの関わりの中で向上したと考えられる項目は生き物に対しても表れており、生き物の気持ちを想像しての言動へとつながった。この生き物の気持ちを考えるというのは、視野・判断の向上によるものである。自然に触れ、知識が増えたこと、五感で感じたことにより新たな視野を取り入れたり、今までよりも視野が広がったりした。これが自分だけや人間だけが良ければいいといったものではなく、生き物たちのことも考えることへと変化していったと考える。また、非依存の向上により、生き物について自分で考え判断することにもつながっていた。	非依存☆ 思いやり 自然への関心 積極性 交友・協調 適応行動 視野・判断 自己規制
04. 水辺も 湖底も 美しく	「03 多様な生き物を守ろう」と同じく、適応行動、自然への関心の向上が水辺や湖底についても知る機会となり、この項目の向上へとつながった。また、思いやりや視野・判断、積極性や自己規制に関しても水辺や湖底に自分たちがどのような影響を与えているかを考え、どうしたら良いか考えるきっかけとなった。それに加え、非依存の向上が自分自身のゴミは自分で片づけたりするといった姿勢にもつながり、「04 水辺も湖底も美しく」に取り組むことができていた。	非依存 積極性 視野・判断 適応行動 自己規制 自然への関心 思いやり
05. 恵み豊かな 水源の森を 守ろう	始めは水源を守ることがどのようなことか、守るにはどうすれば良いか考えることが難しい様子であったが、「03 多様な生き物を守ろう」、「04 水辺も湖底も美しく」と同様に、適応行動や自然への関心、思いやりや視野・判断、積極性などの項目が高まったことで、徐々に子どもたち自身でも考え、間伐材や資源のリサイクルをテーマにしたプログラムにも積極的に取り組む姿が見られた。	積極性 視野・判断 適応行動 自然への関心 思いやり
10. 地元も流域も 学びの場に	7日間を通し、様々なプログラムや生活を自然の中で行い、「10 地元も流域も学びの場に」を実現してきたが、自然への関心が高まり、新たな視野・判断を手に入れたことで、子どもたちは子どもたち自身でこのフィールドを学びの場に、活用していた。生き物や植物の観察など自分たちで発見し、それを仲間同士で共有する場面も見られた。これは適応行動や積極性の向上があつてのものだと考える。	積極性 視野・判断 適応行動 自然への関心



◎7日間の経験を通じて ～CLの視点から感じたこと・成長できたこと・反省～

わんぱくキャンプでは「先生になる」と言う夢が強くなったと感じています。キャンプ中では子どもたちが協力し合い、頑張っている姿、できなかったことができるようになった姿をたくさん見る事になります。それを見ていると、子どもたちの成長をたくさん間近で見ることができる教師という職業は素晴らしいなとより感じる事ができるようになりました。

成長した部分は、子どもたちに「ワンチーム」で動いてもらう様な、発問や問いかけをできるようになったことであると考えています。わんぱくキャンプは「主体性」や「生きる力」が重点的に見られています。それらは子どもたちが、いかに仲間と協力し合い、励まし合い、楽しむかということが重要であると考えます。そのために、たとえば子どもたちに「必ず班全員で行動すること」や「リーダーに聞く前に班のメンバーに聞いてみる」など様々な工夫をしました。その結果、子どもたちは、チーム一丸となって動くようになりました。

足りていなかった点は、子どもたちのメンタルケアであると考えています。6泊7日の間慣れない場所でふと過ごすというのは、子どもたちにとって大きな負担を伴う物です。1日一回は「子どもの不安な事を聞く時間」を取り入れるなど、子どもたちの精神的な不安や負担を取り除くアクションをしてあげればよかったなと考えています。
(文責：とんこつ<1班 GL >)

今回のわんぱくキャンプは、子どもたちと自然環境の中で過ごすという非日常の体験を通じて、自分自身の学びや成長も深める貴重な機会となりました。特に印象に残っているのは、ある子どもが夜の就寝時に「暗いのが怖い」、「虫が怖い」と泣き出してしまった場面です。私はその子の隣に座り、声をかけ、手を握りながら一緒に安心して眠れる方法を考えました。すると少しずつ落ち着きを取り戻し、安心して眠りにつくことができました。この経験を通して、「相手に寄り添う態度」が子どもの安心感と挑戦する勇気につながることを実感しました。また、自然の中での活動は体力的にも精神的にも負荷が大きく、困難に直面する場面が少なくありませんでした。しかし、沢山の仲間と協力し支え合うことで、自分一人では乗り越えられない課題も解決できることを学びました。この経験を通じて、「協調性」や「責任感」に加え、集団の中で自分の役割を考え行動するという力が養われたと感じました。

一方で、自身の課題も明確になりました。第一に、体力や気力の自己管理が不十分であった点です。活動の後半では疲労から集中力が低下してしまい子ども達の様子に気を配ることが出来なくなる場面がありました。教育や福祉の現場では、相手に安心感を与えるためにも安定した態度が求められるため、今後は常に気を配ると共に、自己管理をしっかりできるようにならないといけないと実感しました。

第二に、視野の狭さです。私は自分のことでいっぱいになり、集団全体の動きや他のスタッフの状況に気を配る余裕を欠いてしまいました。教育的活動においては、一人ひとりに丁寧に寄り添う姿勢と同時に、全体を俯瞰して判断する力が不可欠であり、この両立が今後の大きな課題であると考えました。

わんぱくキャンプを通じて、私は「子どもに寄り添う力」「仲間と協力する力」「責任感を持ってやり遂げる力」といった成長を得ることができました。同時に、「自己管理能力の不足」や「集団を見渡す視野の狭さ」といった課題にも気づかされました。

今回の経験を通じて、私は非日常の中で子ども達と関わるということは簡単ではなく、自分の中にあっただなにかする時は助けてあげないといけない、大人がいないと危ないという考え方が一概にも正解ではないということに気付かされました。自主性を守るため挑戦や課題解決は子ども達自身で行うことが子ども達の成長に繋がるということを6泊7日を通して実感しました。また自然の中で子ども達と関わるということは自分自身が万全な状態であり、自己管理が出来ないといけないということがわかりました。今後のキャンプのために自身の課題を解決することが子ども達と最大限関わるためにも大事なのだと思いました。
(文責：るーしゅ<1班 GL >)

わんぱくキャンプを通して始めは子どもとどう接すればいいのだろうかと少し困惑していました。しかし、2日、3日と過ごしていくなかでだんだんと子どもと打ち解けていき、子どもと関わることの楽しさややりがいを感じると同時に子どもと関わる責任の重大さを感じました。また、わんぱくキャンプに参加したどの子どもとも好奇心旺盛で色々なことを私に聞いてきてくれました。質問されたことに返答したり、誕生日の話や好きなことの話など他愛もない会話をしたりして気付けば仲良く話せるようになりました。こういったことから子どもと関わることで子どもとのコミュニケーションの面で成長できたと感じています。他にも、子どもがかまどの扱い方やマキの割り方といった新しいことを学び、経験することで徐々に成長する姿や7日間ともに過ごす仲間たちと協力して物事に取り組んでいく姿を近くから見守っていて子どもの成長し、協力することの尊さを肌で感じることでこういった取り組みなどを通じ、子どもが新しいことを経験し、協力し合うという場がもっとたくさんあればより子どもが明るく生きていけるのではないかと感じました。

最後にこのキャンプを通しての自分の至らなかつた点として私は活動に熱心に取り組みすぎて、連絡を疎かにしてしまったりなどしてしまい、情報共有を上手く行えていなかったり、情報を伝えることはしたもののその情報を自分のところに残していなかったため、あとで確認する際、とても苦労したりということがありました。情報共有や情報管理はどの場面でも重要なことなのに少し抜けすぎている部分があり、こういった部分がなくなるよう自身で気を付けるのと同時になくしていくにはどんな対応が必要か考え、対処したいと思います。(文責：もっく<1班SS>)

今年のわんぱくキャンプでは、私自身初めてサポートスタッフとして参加させていただきました。6泊7日という長期間のキャンプであり、初めてのサポート業務でもあったため不安も多くありましたが、多くの経験を積むことができ、自身の成長を実感できた貴重な機会となりました。

これまで私はグループリーダーとしてキャンプに参加しており、自分の担当グループの子どもと関わる機会が中心であったため、全体の動きを十分に把握できていない部分がありました。しかし、今回サポートスタッフとして関わらせていただいたことで、キャンプ全体を見渡す視点や、時間配分・導線の確認、裏方での準備や調整の重要性について学ぶことができました。また、これまで支えてくださっていたサポートスタッフの方々のありがたみを改めて実感しました。

一方で、優先順位の判断やトラブル発生時の対応については、自身にまだ不足している部分があるとも感じました。6泊7日という長期間の中で、体調を崩してしまうリーダーや子どもがおり、本来であれば速やかに職員へ報告すべき状況であったにもかかわらず、子どもにいち早く寄り添うことを優先してしまつたことがあり、報告・連携の重要性を改めて認識しました。

今回の経験で得た成長や課題は、今後さまざまな場面で活かすことができると感じています。今回の学びを今後の活動にも繋げていきたいと思います。(文責：レーネ<1班SS>)

わんぱくキャンプを通して周りを見て行動し班のみんなと助け合う力の大切さを実感しました。初めてわんぱくキャンプに参加し1人でやり遂げる難しさを身をもって経験しました。7日間の中で諦めたいと感じたこともありましたが、しかし、子どもたちの声や他のリーダーが声を掛け合うことで1人でやり遂げるのではなくみんなでやり遂げることの大切さを学びました。子どもたち自身も班の中で1人体調不良になり帰宅してしまうことになった時も班の中で「寂しいね」の声が上がる中で「帰った仲間の分まで頑張る」と班の子どもたちで声を掛け合い最後までやり遂げることが出来ました。リーダーが頑張ろ！という前に子どもたちが助け合い、最後まで見捨てることなく班のペースで活動することが出来ました。

この経験から私に足りなかったことは子どもたちと活動しながら時間の大切さを教えることに苦戦しました。子どもたちのやりたいことを尊重しすぎることによって全体の時間を奪ってしまうことがありました。4年生から6年生の子どもたちの「はじめて」や「最後」を気にし過ぎてしまいリーダーが手を出すことより思い出に執着してしまいました。子どもたちと思い出を作る中で時間の大切さや仲間の大切さを身をもって感じてもらうきっかけを大切にしていけることが必要だと思いました。

6泊7日で子どもたちのパワーを最大限に受け取り私は最高の仲間と思い出を作ることが出来ました。これから先たくさん辛いこと、楽しいことがあるけど周りをみながら様々な人と一緒に成長していくことを大切にしたいと思います。(文責：らずく2班 GL)

わんぱくキャンプを通して人との関わりの大切さを改めて感じた。自分にとって初めての6泊7日で理解しきれていなかったこともあったが、他のCLに教えてもらう、助けてもらうということで6泊7日乗り越えることができたと思う。

また初めての長期キャンプの中で私が苦手とする虫に対して苦手意識が少し克服でき成長できた。長期キャンプ全ての日において自然の中であるため、普段生活している以上に虫を見かけ、子どもが虫を怖がった際、苦手だが虫を逃がす等した。そしてキャンプが終わり日常生活へと戻った際、以前なら触ることのできなかつた虫をティッシュ1枚で掴み、逃がすことができた。このことから、6泊7日の中で虫への苦手意識の克服に一歩近づいたと考える。

ただ子ども達に対して過保護になっていた部分もあり、子ども達の自主性を伸ばす手助けをする力が私には足りなかった。

わんぱくキャンプを通して感じた事を大切に、今回してもらったこと、得た経験を次は私が他の人に伝えていけるようにしたいと考える。(文責：ろかぼん<2班 GL>)

私がわんぱくキャンプを通して、物事を多面的に捉えることが大事であるということに気づきました。私は2年前のわんぱくキャンプではGL、去年はチーフ、そして今年はSSとそれぞれ違う役職でこのキャンプに関わってきました。3年間全ての年で楽しいと感じましたし、同時にどの年でも大変だと感じることもありましたが、GLをしているときはSSの仕事ってそんなにたくさんある？と感じ、SSをしていた時はGLのほうが100倍楽しそうと感じ、隣の芝生は青いような状態になることもありましたが、その全ての役職が必要不可欠な存在であり、それらが上手く機能していたから6泊7日をやり遂げることができたと考えます。今後はこのキャンプで得たものを活かし、自分の視点だけで物事を捉えず、相手の視点、第三者の視点も考えたいと物事を議論したり、計画をしたりしていきたいです。

また、自分に足りなかった点としては体調の管理が挙げられます。これは今回のキャンプで自分が体調を崩したということは無かったのですが、携わっているリーダー全員が満身創痍でこのキャンプを実行しており、アドレナリンが出ているから体調がギリギリもっているという状態になっていた人も少なからずいたと思います。自分の体調だけでなく、周りのリーダーの様子も確認し、自分を含め無理をしない大切さを学ぶ機会となりました。

来年のわんぱくキャンプでは最年長リーダーとなるので今年の反省を生かし、最年長としてふさわしい行動をとれるよう努めます。(文責：まにまに<2班 SS>)

今回のわんぱくキャンプを通して、私は先を見通して行動する力を身につけることができたと感じている。SSとしてキャンプ運営の補助を行う中で、次の活動を意識しながら行動することの大切さを学んだ。たとえば、活動の流れを踏まえてこの準備は何時間前までに終わらせる必要があるかといった点を考えながら行動するようになった。こうした経験を通して、先を見据えて計画的に動く力が少しずつ身についたと感じる。

一方で、今後の課題として周囲を支える力が十分でなかったと感じている。特に、6泊7日の長期キャンプを初めて経験するリーダーたちは、多くの不安や戸惑いなどを抱えていたと思う。自分自身も不安を抱える中で精一杯取り組んでいたが、もっと周囲に目を向け、困っている人に気づき、支えることができたのではないかと思う。今後は、全体の雰囲気やメンバー一人ひとりの様子をよく観察し、必要に応じて声をかけたり行動したりできるよう意識していきたい。そうすることで、チーム全体がより良い状態で活動できるよう支えられるリーダーを目指したい。(文責：ずーちい<2班SS>)

わんぱくキャンプを通して、3年目のリーダーとして周りをよく見て行動する力が身についたと思います。わんぱくキャンプを開催するにあたって、他のキャンプとは比べ物にならないくらい長い準備期間と6泊7日の本番がありその間に大変なこともたくさんありました。子どもたちやリーダーが困っている時に自分から声をかけてそれぞれの悩みを聞き、一緒に考えることで支えてきました。今までの先輩方がしてくれたように自分の役割だけでなくチーム全体を考えて行動する大切さを学び、状況に応じて柔軟に動けるようになったと感じます。来年は1番上の代としてより責任感をもって引っ張っていきように頑張りたいです。(文責：すふれ<3班GL>)

最初は不安の連続で年齢も性格も共通点もない中上手く関われるのか心配だった。しかし、同じ時間を過ごし食事を作り活動に取り組む中で不安は取り除かれたように感じた。

成長できた部分は自分から関わる力だと思う。話しかけられるのを待っていては距離が縮まらないと思い勇気をだして声をかけ、一緒に遊んだり話したりすることで信頼関係が生まれた。自分の行動によって場の雰囲気や人との関係が変わることを実感した。

一方で自分に足りなかった点は自分の考えを優先してしまったり後先考えずに物事を話してしまったりなどする場面があったと思う。子ども一人ひとりの個性や気持ちをしっかり受け入れる姿勢が必要だと感じた。

また、疲れたときや1人になってしまった時に周囲に頼ることができず我慢したり抱え込んだりしてしまうことも課題だと思う。(文責：もなか<3班GL>)

7日間のわんぱくキャンプでは、子どもたちの安全を第一に考えながら活動を進める中で、状況を見て判断し、行動する力が身についたと感じた。子どもたちの様子を観察して必要なサポートを行うように意識した。また、子ども一人ひとりの性格やペースに合わせた声かけを行う中で、相手の立場に立って考える力や、根気強く関わる姿勢も育つなど、対応力の面で成長を感じた。

一方で、目の前の子どもへの対応に集中しすぎて、全体の進行や他のスタッフの動きを見落とすことがあり、チーム全体を意識した行動が課題として残った。特に、トラブルや不測の事態が起こった際に、すぐに周囲へ共有・相談する判断が遅れることがあったため、連携を意識した報連相の重要性を実感した。今後は、自分の役割を果たすだけでなく、仲間との情報共有をこまめに行い、全体の状況を把握しながら行動できるようにしていきたい。(文責：チャーてえ<3班SS>)

6泊7日のわんぱくキャンプでは、SSとして各班の活動を支援し、裏方として食事や道具の準備、生活面での支援を行った。活動の円滑な進行を支える立場として、常に全体の流れを把握し、必要な場面で素早く対応することを意識した。限られた時間の中で、子どもたちやリーダーの動きを見ながら次に必要となる準備を考え行動することは容易ではなかったが、その経験を通して、状況を的確に判断し、臨機応変に対応する力が身についたと感じている。

また、他のリーダーと協力しながら安全面や活動面を支える中で、全体を見て動くことの重要性を学んだ。

一方で、子どもたち一人ひとりとの関わりが浅くなってしまった場面もあり、個々の成長や変化に目を向ける時間を十分に取れなかったことや、GLへの支援において、状況を先読みして行動する力が不足していたことが課題として残った。

今後は、活動全体を支える視点を持ちながらも、子どもとの直接的な関わりや、他のリーダーとの連携を一層強化し、組織全体としてより良い運営ができるよう意識して行動していきたい。

(文責：くくるん<3班SS>)

わんぱくキャンプに参加して、子供たちを集団としてまとめる力が身についたと感じた。様々な個性を持った子供たちが集まっている中で、子供たち同士で協力しあって活動ができるように、声かけを工夫したり、役割分担を意識して促すことで一人一人が自分の得意なことを活かしながら活動に参加できるようにすることが出来た。また、このような活動からただ指示を出すだけでは子供たち自身が考え、動き、解決していく姿を支えることが大切だと学んだ。

(文責：ばたばた<4班GL>)

わんぱくキャンプを通して、子どもたちと関わりながら集団を動かす難しさと、その中での自分の役割を考える機会になった。山登りや調理、クラフトなど活動の種類が多くて時間に追われる場面があり、その中で予定通りに進めることばかりに意識が向いてしまい、子どもの様子に十分に目を向けられないことがあった。進行と子どもの気持ちや自主性のどちらにも目を向け、バランスを取ることが自分にとっての課題だと感じた。

また、自分が子どもの頃に参加していた立場から見ると、当時リーダーがどのように支えてくれていたのかを改めて実感した。特に活動の準備や時間の調整など、見えない部分での支えがあってこそ、子どもが安心して楽しめることを学んだ。実際にキャンプリーダーとして関わる中で、子どもに寄り添うだけでなく、全体の流れを整える力も必要だと感じた。

この経験を通して、自分には状況を先読みして動く力や、臨機応変に判断する力がまだ足りないことに気づいた。今後は、活動の目的や子どもの姿を常に意識しながら、臨機応変に対応できる判断力を身につけていきたい。リーダーとして全体を見渡しつつ、個々への関わりも大切にできるようにしていきたい。

(文責：しえる<4班SS>)

わんぱくキャンプを通して、自分自身が1番成長したと感じるのは、子どもの自主性を育てる関わり方が出来るようになった点です。今までは、子どもが困っていると感じたらついすぐに口を出してしまったり、答えを教えてしまったりすることが多かったです。しかし、今回のキャンプでは「子どもの自主性を育てること」が大きな目標とされていたので、今回は困っている場面でもできるだけ「どうしたらいいかな？」など子ども自身で考えさせるような声掛けをする、「見守る」姿勢を大切にしました。そうすることで、子どもたち自身が話し合い、考え、行動する姿を多く見ることができました。

その一方で、自分には状況を見極める力がまだ足りないと感じました。子どもの行動を見守ることと介入することのバランスを取ることは難しく、「見守る」姿勢をとりすぎてプログラムが上手くいかなかったり、子どもが怪我をしてしまったりすることをありました。もう少し状況を判断する力を身につけなければならないと感じたし、見守る時ももっと一人ひとりの子どもをきちんと観察しなければならないと思いました。
(文責：ネモ<4班 SS>)

今回のキャンプでは、子どもに対してきちんと向き合うことができたと感じる。言うことを聞かない子に対しても、逃げずに話をして自分の気持ちを伝えることができた。また、自分一人で抱え込まず、人に相談したり頼ったりすることで、気持ちを整理したり新しい考え方に気づいたりすることができたのも大きな成長だと思う。

一方で、全員に対して平等に接することができなかつたと感じる。自分のところに来てくれる子とはよく話していた反面、そうでない子どもへの声かけが少なかった。また、もっと早く気づいて行動できたと思う場面も多く、自分の観察力や判断の遅さを実感した。
(文責：ころも<5班 GL>)

わんぱくキャンプを通して、僕は子どもの成長スピードに驚きました。子ども達ははじめできなかった事でも、僕たちリーダーができたこと挑戦したことを褒めてあげたらそのあとは自ら動いてくれることが分かりました。

この経験から、何でもかんでもリーダーが教えて手伝ってするよりも、褒めて伸ばしていくことが大切なんだと気づき、今後を生かしていくことができると感じました。

自分に足りなかったことは、もっと子どもと話せばよかったなと思いました。初めてわんぱくキャンプに入ってひとつひとつのプログラムをこなすことで目一杯になっていました。そのため、はじめの数日は全体に迷惑をかけないことばかり気にして子どもたちと仲を深めるための会話が少なかったことを後悔しています。特に女の子とは、活動中の質問やこちらからの指示を伝えることばかりで仲を深めることができなかつたと感じています。6泊7日という期間で活動するなかで人間関係は特に大切だと思いました。この経験から今後は子ども達との絆作りを大切にして、子ども達の新たな発見や成長に繋がりたいと思いました。
(文責：すずろん<5班 GL>)

わんぱくキャンプを通して感じたのは、子どもたちが親元を離れて過ごす中で、自分なりにいろいろ考えて動こうとする姿がたくさん見られたことだった。六泊七日の生活の中で、できることが少しずつ増えていく様子をそばで見ていると、その変化がとても自然で、ゆっくりとした成長として伝わってきた。私は昔、参加者としてこのキャンプに参加していたが、今回は初めてリーダーとして関わり、立場が変わると子どもたちの姿が違って見えるんだと気づいた。特に、子どもたちの想像力の豊かさや、物事を柔らかく受け止める考え方は、活動の中で印象に残った。

私はSSとしてずっと同じ班にいたわけではないけれど、班に入るたびに、子どもたちが自分でできることを探して動こうとしている様子を見ることができた。そのたびに、リーダーとしてそばで支えることの大切さを、少しずつ理解していったように思う。

一方で、自分の中には課題もあった。まだリーダーとして慣れていないところがあり、先輩の指示がないと動きにくい場面もあった。これからは、状況をよく見ながら、自分で判断して動けるようにしていきたいと思う。今回のキャンプでの経験は、自分にとっても新しい発見が多く、これからは生かしていきたいと思える時間だった。
(文責：きり<5班SS>)

活動を通して、「助けすぎない関わり方」を意識するようになった。子どもが自分で考えて行動できるよう、すぐに手を貸すのではなく見守る時間を大切にしたい。その結果、子ども自身が試行錯誤する姿や達成感を味わう場面が増え、教育的効果が得られる距離の取り方を学ぶことができた。

一方で、班の中で一人の子どもが途中で帰宅するという出来事があった。後に、班内の人間関係に悩んでいたことを知り、当時そのサインを十分にくみ取れなかったことを反省した。表面的な行動だけで判断せず、子どもの内面に目を向ける観察力や傾聴力の不足を実感した。この経験は、子どもたちの「心理的安全性」を支える視点の大切さを考えるきっかけとなった。

また、スタッフ同士の情報共有や連携の重要性も学んだ。子どもが安心して過ごせる場をつくるためには、一人で抱え込まず、チームとして課題を共有し、早期に対応することが欠かせない。今後は、子どもの小さな変化を丁寧に観察し、必要に応じて相談・報告を行う姿勢を大切にしていきたい。

(文責：ぱおぱお<5班SS>)

子どもたちが自分で考えられるように声かけや環境づくりを意識しました。ただ手伝うのではなく、「どうしたらできるか」を一緒に考える援助ができるようになった。長く一緒に過ごすので、「今日はちょっと元気がないな」や「昨日できなかったことができるようになった」など、子どもの心身の変化に気づきやすくなった。
(文責：あれら<6班GL>)

私は、わんぱくキャンプで様々なことを得ることが出来ました。まず1つ目は、視野を広げることです。調理中、子どもたちがかまど周辺で走るなど危険なことをしていないか注意して見ないといけない部分も多くありました。そのため、常に子どもを見渡すことが出来る立ち位置にいるよう心がけたり、ひとつのことをみるのではなく、他の場所にも目を向けたりなど視野を広くもって行動する場面がありました。2つ目は、少しの変化にも気づく力です。6泊7日のキャンプの中で、日常との環境が変わることもあり、子どもが体調を崩すことがありました。そこで、子どもは「大丈夫」と言っているけれども本当は無理している大丈夫じゃないこともあります。なので、私たちキャンプリーダーが子どもの変化に気づき、対応することも必要です。また、班で行動するので、班での人間関係にも注意してみることも大切です。その時、何かあった時にいち早く気づけるように普段の子どもたちの行動や仕草などをみるよう心がけていました。逆に、まだまだ力不足に感じることも多かったです。今年のわんぱくキャンプでは子どもの自主性を尊重し、育てることを意識していました。しかし、プログラムには時間が限られており、私たちが子どもたちに指示をしてしまうと自主性が無くなってしまいますので、どのように声掛けをすれば時間にも間に合い、子どもたちに急かしている空気感を出さず、自主性も大切にできるのか苦戦しました。そのため、最終的には子どもを急かしてしまったり指示をだしてしまいました。これは自分の課題だと思い、言葉選びや上手く時間に収められるように作業できるのかを勉強していこうと思いました。しかし、子どもたちもとても成長し、最終日には私が声をかけなくても自ら班の子どもたちに指示をしたり、時間をみて行動するなど初日とは違う子どもたちを見ることが出来ました。このように、わんぱくキャンプで自分の足りない部分や成長できた部分など、自己分析をすることもでき、これから子どもと関わっていく上で大切な力を身につけることができました。子どもたちの成長の速さにも驚かされることや大変なこともありましたが、自分にとってかけがえのないもの時間を過ごすことができました。

(文責：らもち<6班 GL >)

私はサポートスタッフ (SS) として、6泊7日のわんぱくキャンプに参加した。

私たち SS は、子どもたちと毎日関わるのではなく、1日おきに活動を共にする体制であった。そのため、1日目より3日目、3日目より5日目と、子どもたちの成長を客観的に見ることができた。特に大きく感じたのは、子どもたちの「学ぼうとする姿勢の変化」である。1日目から3日目までは、希望が丘文化公園の自然について GL (グループリーダー) を中心に学んでいたが、「これは何?」「なぜこうなるの?」といった問いかけは少なかった。メモを取る姿は見られたが、そこからさらに思考を深めようとする行動にはあまり繋がっていなかった。しかし、4日目以降になると、GLの説明に対して自ら質問をする姿が多く見られるようになった。GLもそれに応じて丁寧に説明を準備していたため、学び合う場としてより充実した時間になっていたように思う。

私自身がこの7日間で成長したと感じるのは、「子どもを観察する力」である。関わる日数が限られていたため、短い時間の中で子どもたちの変化や成長を捉え、言葉にして伝えることを意識した。成長した部分を具体的に褒めることで、子どもたち自身が「自分は今できている」と自覚し、次の意欲へとつなげることができたと感じる。また、限られた時間を有効に使い、できるだけ多くの子どもたちとコミュニケーションを取り、精神的な支えになれるよう努めた。

一方で課題として残ったのは「待つ姿勢」である。子どもたちに成長してほしいという思いが強すぎるあまり、困っている場面で手助けをしすぎてしまうことがあった。危険でない場面でも、少し苦戦している様子を見ると、つい助けたくなくなってしまい、子どもたちの自主性を育てる機会を減らしてしまったと感じる。

今後は「どこまで見守り、どこで助言するか」という判断を意識的に行い、GLを含めたリーダー全員で共有しながら、子どもたちのより大きな成長を支えられるようにしたい。

(文責：おちょ<6班 SS >)

私が6泊7日のわんぱくキャンプを通して成長できたと感じたことは、「見通しを持つ力」です。

4年間キャンプリーダーを続けてきましたが、今回のキャンプではこれまであまり経験のなかったSSを担当しました。その中で、「次のプログラムではこの準備が必要」「次の調理ではこのメニューを作るからこの器具を用意しよう」といったように、先を見通して行動する力が身についたと感じています。

一方で、この6泊7日を通して「全体を見る力」をもう少し伸ばす必要があるとも感じました。SSの担当であったため、常に子どもたちと一緒にいるわけではありませんでした。自分の班だけでなく他の班にも目を配ることができていれば、より良いわんぱくキャンプをみんなで作り上げることができたのではないかと思います。

(文責：るぱー<6班SS>)

わんぱくキャンプを通して感じたことは、1週間という短い期間の中で、子どもたちにとって別れを惜しむほど大切な存在や思い出を作ることができるということである。自分が成長できたことは、カメラマンとして子どもとリーダーの関わりを俯瞰して見ることで、リーダーに求められる力に気付くことができたことである。リーダーが子どもにどう声をかけるか、どれだけ一緒に楽しむことができるかによって、班内の空気を大きく変えることができる。子どもにとってプラスとなるプログラムを考えることも重要であるが、それを近くで行うリーダーが子どもたちをどれだけ引っ張っていくか、気分を盛り上げるかによって、プログラム1つ1つが子どもにとっての「貴重な経験」や「大切な思い出」に変わるのではないかと考える。だからこそわんぱくキャンプで子どもの成長を期待するのであれば、子どもと共に活動するリーダーを鼓舞し、経験や思い出に繋ぐことが、リーダーに求められる力なのではないかと考える。自分に足りなかった部分は、カメラマンの役割を十分に理解していなかったことである。MLGSやIKRの資料の内容をきちんと頭に入れた上で撮影し、求められているものを事前に捉えておくべきだった。

(文責：コットン<カメラ係>)

7日間を通して子どもができるようになったことは、3つあると考える。1つ目は、自分のことを自分ですることである。自分自身の朝の準備や片付け、荷物の整理を最初は整理整頓などせず、自分の準備をするのにも時間がかかっていたが、最終日にかけて自分でできるようになっていた。2つ目は、仲間と協力して役割分担をすることである。班で仕切る子や、みんなが気づいていないことに気づく子など、班の中で自然と役割分担ができていた。3つ目は、感情を素直に出せるようになったことである。喜びや感謝、悲しさなどを、表情や言葉で表現できるようになった。仲間やキャンプリーダーとの信頼関係を築き、素直に感情を出せるようになっていた。

これとは別に、3つの課題点が挙げられる。1つ目は、最後までやりきる力である。楽しいことだけでなく、大変なことにも前向きに取り組む力をもっとつけていきたい。2つ目は、時間を守ることである。時計係を班に1人つけ、時間を子ども自身で見て管理してもらっていたが、時間通りに行かないことがあった。これからの生活でも時間を守ることは大切なので、時間を見て行動する力をつけてほしい。3つ目は、自分の思いや気持ちを相手と理解し合うことである。時にはぶつかることも大切だが、自分の気持ちや考えを伝えて理解し合うことも、同じくらい大切である。

このことから未熟ながらも頑張っている子どもの様子が6泊7日で見られたと感じた。しかし、この6泊7日の自然体験は子どもたちにとって有意義な時間になったと考える。楽しいことばかりではなく、つらいこと、悲しいこともあると思うが、この経験を思い出して前に進んでほしい。

(文責：らぶ<チーフ>)

6泊7日を通じて、子どもたちと自然や生き物との関わり方、子ども同士やリーダーとの関わり方など、多くの変化と成長が見られた。

まず、自然や生き物との関わりについて、ハイキングや間伐の利用など様々なプログラムを行った。あらゆる面から関わったことで、単に知識を知るだけでなく、自分なりに自然を楽しみ、仲間と共有することができていたと感じる。また、植物の妖精を通して、子どもたち自身で自然を観察する力や発見する力も身についたのではないだろうか。

次に子ども同士やリーダーとの関わりについては、1日目は自分を出せずにいたり、リーダーの指示を待っていたりとしたが、日が経つにつれ仲間同士の絆も深まり、相手の意見を聞いたり、自分たちで考え主体的に動くことができるようになっていた。

6泊7日という短い期間であったが、子どもたちが見せてくれた変化や成長には、驚かされる場面が数え切れないほどあった。1日目と7日目の姿を比べると子どもたちの様子は大きく違っており、この経験は子どもたちにとって大きな影響を与えたものになったと感じる。日常では体験することのできない環境やその日したプログラム、6泊7日をともに過ごした仲間たちというのはかけがえのない思い出や存在となったのではないだろうか。この経験を今後にも活かして行ってほしいと思う。

(文責：みんと<サブチーフ>)

7日間を通して強く実感したことは、子どもたちが持つ適応力の高さと成長の速さに驚かされました。はじめて調理をするという子が最後の日には、自分から動いて他の子を助けるという場面がありました。このことから7日間の経験を吸収する力には驚きました。また、キャンプリーダーと関わるなかで、子どもたちのために考えて全力で取り組む姿勢が多くみることができました。1週間という長期キャンプを実施するにあたって3か月の時間を費やしました。キャンプを計画するなかで困難や挫折することも多くありました。そのときに支えてくれたのは、仲間たちでした。準備をするにあたって様々なリーダーと関わり多くの考え方に触れると同時に、自分たちは多くの人に支えられていることを実感しました。参加した29名のキャンプリーダーはもちろんですが、他にも相談を聞いてくれた人、応援の言葉をかけてくれた人など多くの人が関わってくれました。今回のキャンプは多くの人のおかげがあって実施できたキャンプです。私たちの生活は多くの人の上にあること忘れないようにしたいです。

今回のキャンプの中で私に足りないと感じたことは人を頼ることです。準備期間を通してF3で活動することが多くありましたが、他の人に自分から助けを求めることができていませんでした。3人では大変なことも多くあり、気分が落ち込むこともありました。一緒に活動する仲間を頼れば、もっと楽しく活動することができたのかなと考えます。今回の経験から人に頼ることの大切さと頼ることは恥ずかしくないということ実感できました。自分からは困っているということ発言できない子どもも多くいると思います。そんな子どもたちに人に頼ることを教えてあげたいと思います。

(文責：でんぷん<フード>)

○総括（サブチーフ：みんと）

本キャンプでは「心から心へ～自立と協力の7日間～」というテーマのもと、ここ希望が丘文化公園だからこそできる活動を目指し、この体験プロジェクトを行った。ここで行った活動は子どもたちの「生きる力」や「非認知能力」、および自然への理解や興味・関心の向上を目的としたものである。

子どもたちは7日間を通し、大きな成長を見せていた。最初は不安や戸惑いを見せていた子どもたちも次第に自分の意見を伝え、仲間と助け合う姿が見られた。特に野外調理やハイキング、創作活動などの場面では失敗や試行錯誤を経て、最後までやり抜こうとする粘り強さが育まれた。また、自然の恵みや命に向き合う活動を通し、感謝や思いやりの心が芽生え、食材や資源を大切に扱おうとする行動が見られるようになった。このような自らの手で作り、考え、振り返るといった経験の積み重ねが子どもたちの「生きる力」そのものの成長につながったと感じる。この体験は子どもたちにとってかけがえのない、貴重なものであった。

また、成長していたのは子どもたちだけではない。本キャンプの指導にあたったキャンプリーダーにとっても、この7日間は大きな学びと成長をもたらすものであった。子どもたちの主体性を引き出すために、あえて見守る姿勢や気づきを促す問いかけなど、これらの指導方法を実践する中で、キャンプリーダー自身も「支える側」としてのあり方について深く考えることとなった。

本キャンプは子どもたちとキャンプリーダーが共に成長し合う場であったと言える。
アンケート等の客観的なデータについては、後日まとめるものとする。



希望が丘夏休みわんぱくキャンプ

事業概要

このキャンプでは、テーマ・ストーリーを掲げ、参加者の「生きる力」や「非認知能力」の向上に工夫を凝らし、心身の健全な発達を促し、また環境負荷低減に少しでも理解と行動ができるよう、各種プログラムを構築、そのマニュアル、指導方法を工夫し、実践する。特に心の成長、「思いやり」「強い気持ち」「絆」「感動」等の主観的な指標も大切に、事業を実施、検証する。

自然を楽しみながら学ぶ場を提供し、SDGsの枠組みの中で、次の4項目の目標を定め、その達成のため、子どもたちが自主性や協調性を身につけ、野外活動や自然活動の各種プログラムを体験してもらう。※「滋賀県版MLGs」の「多様な生き物を守ろう」「水辺も湖底も美しく」「恵み豊かな水源の森を守ろう」「地元も流域も学びの場に」を中心に、計画、実践を行い、また7日間の時間を有効に活用し、課題解決する能力を身につけ、防災にも触れる機会を設ける。この当該プログラムの効果を把握し、事業改善の手法を用い、全国的な普及に努める。

現状と課題(一部抜粋)

自然や環境への理解不足も、状況は左記と同様である。SDGsは、学校で学ぶ機会は増えているが理論や机上での議論が多く、実体験での機会が乏しい。与えられた課題には取り組むが、自分を取り巻く環境で自ら考え、継続して行動する機会は少ないことが現状である。この実体験の場を与えることが大切である

実際のプログラムと指導法

画像とプログラム名、指導方法を「多様な生き物を守ろう」「水辺も湖底も美しく」「恵み豊かな水源の森を守ろう」「地元も流域も学びの場に」の4項目に2つずつ掲載



03 多様な生き物を守ろう

①活動の周辺に多様な生き物が生息していることに気づき、子どもが愛着を持てるような声掛けや関わり方をする

②ローインパクトの考え方が微生物を守ることを伝え、理解した上でファイアーを行うことで、楽しみつつ環境に配慮することを学ぶ



04 水辺も湖底も美しく

①玉ねぎの皮を集め染め物に活用することで、普段は捨てている部分も再利用することが出来ることに気づく

②満水リレーで水を節約する大切さを伝え、その意識を持つようになった。以後水を出しっぱなしにしないよう、声掛けをするようになった

05 恵み豊かな水源の森を守ろう

①ツナ缶の汁を集めてロウソクへと再利用することで、ツナ缶の汁を捨てずに活用できる方法がある事を体験する

②間伐材の薪を使って調理を行うことで、森の恵みが自身の命を紡ぐことに繋がっていることに気づく



10 地元も流域も学びの場に

①間伐材について説明し実際に活用することで、資源の大切さに気づく

②クイズに出すことを明示した上で、琵琶湖博物館内を散策することで、自ら地域の生き物や環境について学び取るようになる

お問い合わせ：滋賀県希望が丘文化公園

仲間との関わり

(交友、協調・思いやり・積極性)

7日間を一緒に過ごすメンバーというのは、学校や習い事での友達とは異なり、朝起きてから寝るときまで、一日の全てを一緒に行動する仲間である。様々な場面、長い時間を共に過ごすからこそ育まれる交友や協調性、思いやりや積極性などの力を伸ばすことをねらいとした。



自然との関わり

(自然への関心・野外技術、生活)

一日の中、7日間を通して、自然の様子に変化していくことをキャンプ全体で子どもたちに身をもって感じてもらい、自然への関心へとつなげた。

また、野外調理やロープワークなど、日々新しいことに触れるだけでなく、7日間継続して行うことで、野外生活の技術や知識を身につけることを目的とした。



令和7年度 文部科学省委託事業
「体験活動を通じた青少年自立支援プロジェクト」



希望が丘夏休み わんぱくキャンプ

判断・対応力
(視野、判断・適応行動)

自分の内面・生き方
(現実肯定・まじめ勤勉)

見聞録

リフレクションの時間を設けることや、それを継続して行うことで現実肯定やまじめ勤勉といった自身の内面につながる部分の成長を促した。

また、自然やMLGsについて、学校で学んだこととの紐付け、7日間で学んだことの活用で学びのつながりを感じてもらったこととした。

家では使うことのできる電子レンジなどの家電製品、娯楽であるテレビやゲームなどがない状況で、調理にも様々な方法があること、自然での楽しみ方など

新たな知識・技術などに触れる機会とし、視野を広げることを目的とした。

そして、子どもたち自身で新たな方法などを模索するといった適応行動を高める活動を目指した。

自立・自己コントロール (非依存・身体的体制)

7日間を通し、調理やプログラム内でキャンプリーターからの助言を段階的に減らしていくことで、子どもたちだけで話し合い、協力し合える環境を作り、非依存性を高めることに取り組んだ。また、日常とは異なった環境で過ごすことによる身体的体制の向上を図った。

キャンプリーターの変化

子どもたちのことを考え取り組んできた準備期間から、本番の最終日まで、キャンプリーターの心境の変化や成長は大きなものであった。その中でも、視野の広がり多くの学びをもたらした。キャンプリーター自身の課題や子どもとキャンプリーターとのつながりなど、この体験でしか得られないものに触れての変化があった。



お問い合わせ：滋賀県希望が丘文化公園

長期自然体験について

－ 希望が丘夏休みわんぱくキャンプから考える －

○豊田 博（公益財団法人滋賀県希望が丘文化公園 管理監） 木村 燦徳（希望が丘キャンプリーダー） 西村 一夏（同左） 平野 光祐（同左） 宮部 央雅（同左）

キーワード：長期自然体験、生きる力、非認知能力、MLGs、リフレクション

1. はじめに

現代の子どもたちは、ネット環境の普及による仮想体験への偏りや、コロナ禍の影響で対面経験やフィールドワークが減少したことにより、「生きる力」や「非認知能力」を育む機会が不足している。学校現場でもこれらの体験機会は十分とは言えず、自ら考え継続して行動する力の育成が課題となっている。

本事業は、文部科学省の委託を受け、6泊7日の長期自然体験を通して参加者の自立心や協調性を養うとともに、滋賀県独自の持続可能な社会目標である MLGs（マザーレイクゴールズ）への理解と行動を促すことを目的として実施された。

特に、心の成長（思いやり、強い気持ち、絆、感動）といった主観的な指標を大切にしながら、教育的効果の高いプログラムの構築を目指した。

2. 実践の内容

令和7年度は「心から心へ ～自立と協力の7日間～」をテーマに掲げた。本キャンプでは、単なる活動の羅列ではなく、子どもたちの関心と意欲を維持するための「ストーリー」と「10のプログラム」を軸とした構成をとった。

(1) ストーリーテリングと「植物の妖精」の活用

キャンプ全体に「妖精の家の真っ白になった本を、キッズが力を合わせて復活させる」というストーリーを導入した。

また、活動フィールドである希望が丘文化公園の植物（アカマツ、コナラ、イロハモミジ、ユズリハ、リョウブ、ヤマザクラ、サルトリイバラ）をモチーフにした「植物の妖精」を各班のマスコットとして設定した。

これにより、指導者側も自然への理解を深め、子どもたちが「妖精（植物）を助ける」という動機付けから主体的に自然観察や環境保全に取り組む仕組みを構築した。 <右記にイラスト掲示>



▲アカマツの妖精
(まつぼん&ぼくぼく)



▲コナラの妖精
(コナラン)



▲イロハモミジの妖精
(ぱくもみ)



▲ユズリハの妖精
(ユズリーナ)



▲リョウブの妖精
(リョウブシ)



▲ヤマザクラの妖精
(やまざえもん)



▲サルトリイバラの妖精
(サルトリッチ)

(2) 「10のプログラム」の実践

五感を通じた学びを深めるため、以下のプログラムを段階的に実施した。

㊦ 森の再生と再利用

間伐材を活用したネーム作りやロープワーク、ランタン台の制作を通じ、資源の循環と里山保全の意義を学んだ。



◀ランタン台作り
(ロープワーク)
↓
巻き結びや角縛りなどのロープワークを駆使して作成した。

④ 防災への第一歩

メスティンを用いた調理や、限られた水での洗浄、廃材(段ボール)を利用したオープン作りを通じ、非常時の工夫と節水の重要性を体験した。



◀段ボールオープンづくり
↓
段ボールの内側にアルミホイルを貼り、オープンに炭を入れても燃えない工夫をした。

⑤ 地産地消と命の繋がり

滋賀県立琵琶湖博物館での学習、守山市道の駅「おうみんち」での食材調達、鮎のつかみ取りと調理を通じ、命をいただくことへの感謝と地元食材への理解を深めた。

⑥ リフレクション

毎晩、絵日記や振り返りシートを用い、その日の気づきを言語化する時間を設けた。最終夜のキャンドルセレモニーでは、自作のキャンドルを囲み、6日間の成長と仲間への感謝を共有した。



(3) 安全管理と信頼関係の構築

6泊7日の長期活動を支えるため、本部・指導

班・監視班・救護班等の組織的な安全管理体制を敷いた。また、キャンプリーダーは子ども一人ひとりの気持ちに寄り添うメンタルケアを重視し、怪我や体調不良を言い出しやすい信頼関係の構築に努めた。

3. 結果と考察

(1) 非認知能力 (IKR: 生きる力指標) の変容

事前・事後のアンケート分析の結果、令和7年度は特に「非依存」「視野・判断」「現実肯定」「適応行動」の項目で向上が見られた。

野外調理ではリーダーに頼らず節水や食材の廃棄削減を自ら行う姿や、雨天による急なプログラム変更を前向きに受け入れる姿が確認された。

一方で、「積極性」や「まじめ勤勉」では、時間に追われる場面でリーダーの介入が増えたことなどが要因となり、統計的に有意な向上には至らなかった。

(2) MLGs (環境意識) の達成状況

MLGsの視点では、「多様な生き物を守ろう」「地元も流域も学びの場に」の項目で有意な向上が見られた。特に、妖精を介した自然観察や、琵琶湖博物館での実体験を伴う学習が、具体的な環境保全への意識を高める結果となった。

一方で、「水源の森」や「水辺の美化」といった抽象的な概念は、日々の節水行動がどのように琵琶湖に繋がるのかをより明確に意味づけするリフレクションの強化が必要と示唆された。

(3) 指導者 (キャンプリーダー) の成長

キャンプリーダー自身も、子どもの自主性を尊重し「待つ」ことの難しさを経験する中で、自己管理能力や全体を俯瞰する視野を養った。子どもとリーダーが共に成長し合う場となったことが、本キャンプの大きな教育的成果である。

4. おわりに

本キャンプの実践を通じて、生活そのものを学びの場とする長期自然体験が、子どもの自律的判断力や他者への適応力を高める上で極めて有効であることが実証された。

今後の課題として、体験した個々の活動をより深い環境教育的価値へと昇華させるため、振り返り(内省)の仕組みをさらに洗練させ、体験と概念の接続を強固にする必要がある。

本事例が、他の地域や学校教育における自然体験活動の充実、および持続可能な社会を担う人材育成の一助となることを期待する。

希望が丘キャンプリーダー活動の継承と全国発信に向けて

1 はじめに ～「滋賀県希望が丘文化公園」が紡いできた長期宿泊キャンプの価値～

滋賀県希望が丘文化公園では、昭和60年から平成7年までに「希望が丘夏休みわんぱくキャンプ」を41回開催。令和6年7年は文部科学省委託事業として採択され実施。この2年間は、子どもたちの「生きる力」や「非認知能力」の向上を目的とし、琵琶湖版SDGsである「MLGs（マザーレイクゴールズ）」の視点を取り入れた先進的な取り組みも行いました。

私たちは、この希望が丘で培われた長期宿泊キャンプのフレーム構造や経験値を単なる一過性の記録に留めるのではなく、来年度以降の活動や全国への普及に向けた貴重な素材として継承していきたいと考えています。

2 「わんぱくキャンプ」のシステムと多角的な分析

わんぱくキャンプの最大の特徴は、枠組みである「フレーム」において「10の大きなプログラム」と、子どもたちの意欲を引き出す「ストーリー」の導入にあります。

・評価点の分析

IKR（非認知能力）やMLGs指標を用いた統計的分析により、特に「非依存（自立）」「視野・判断」「現実肯定」といった項目で顕著な成長が確認され、子どもたちがリーダーに頼り切るのではなく、自ら考えて行動する姿や、仲間と協力して困難を乗り越える姿勢が、LNP（ラストナイトパーティー）などの活動を通じて実証されました。

・課題点の抽出

一方で、プログラムの過密によるリフレクション（振り返り）時間の不足や、天候不順時の代替案の工夫、指導者側の介入度合いの基準設定など、改善すべき点も明確になり、これらの経験値や課題の分析結果を詳細に記録に残すことで、次世代のキャンプリーダーがより質の高いキャンプを構築するための礎としたいと考えます。

3 全国発信と地域性に合わせた展開

私たちは、この滋賀県希望が丘文化公園の活動を全国に発信していくにあたり、単にシステムを模倣するだけでなく、それぞれの地域性や時代のニーズに合わせたキャンプ活動へと発展させてほしいと願っています。

・独自の地域性の追求

滋賀県では「琵琶湖」を軸にしたMLGsを取り入れましたが、全国の他地域であればその土地特有の自然環境や文化、歴史を反映させることが可能です。

・時代のニーズへの対応

現代の子どもたちに不足しがちな対面経験やフィールドワークの機会を提供し、「自分で考え、仲間と解決する力」を成長させるような独自の地域性のあるキャンプが、滋賀県希望が丘の手法を基本に、全国のどこかで新たに誕生することを期待したいです。

4 大学生リーダーの成長と社会への橋渡し

キャンプ活動を支えるのは、大学生を中心としたキャンプリーダーです。希望が丘夏休みわんぱくキャンプに参加するリーダーであれば、3ヶ月以上にわたる準備期間と6泊7日の本番を通じて、子どもたちのために、安全管理やプログラム運営の責任を担います。

・リーダー自身の成長

活動を通じて、リーダーは「相手に寄り添う態度」「集団を俯瞰する視野」「責任感」「チームでの情報共有（報連相）」等、社会に出る上で不可欠な能力を身につけていきます。

・社会貢献への意欲

子どもたちの成長を間近で見守る経験は、キャンプリーダー自身の自信となり、将来教師や社会人として活躍するための強力な糧となっていきます。大学生がキャンプという現場で多様な経験を積み、豊かな人間性を備えて社会へと羽ばたいていくことを応援していただきたいです。

5 尽力の記録 ～希望が丘のアイデンティティを未来へ～

最後に、子どもたちが多様な経験をできるよう、キャンプというツールを用いて心血を注いできた人たちが、滋賀県希望が丘文化公園にいた記録をしっかりと残していきたいと強く思います。

よりよい指導方法の確立に向けて議論を重ねた日々、安全管理体制の構築、子どもたちの小さな変化に一喜一憂したリーダーの熱意は、資料の至る所に刻まれています。

これらの記録は、単なる活動報告ではなく、「人と人」「人と自然」をつなぐために尽力した先達の証だと確信します。

この情熱を次世代のリーダーが引き継ぎ、さらに発展させていくことで、全国の子どもたちに豊かな「体験」が届き続けることを期待します。

希望が丘キャンプリーダー ばたばた



この報告書をご覧いただき、希望が丘キャンプリーダーの想いを乗せてまた継承するため、『全国発信』します。わが街で「町おこし」「若者に地域とかかわりを！」「子どもたちに体験をしてもらいたい」など、全国津々浦々でその思いがあれば、ぜひ連絡をいただきたいです。

子どもたちを指導する青少年を指導する人材がない場合、日本キャンプ協会、各都道府県キャンプ協会に問い合わせすることもできます。指導方針や地域性に富んだプログラムを実施したい場合も同様です（滋賀県希望が丘文化公園にまずはご一報を！）またボーイスカウト連盟やシェアリングネイチャー協会も得意分野で協力いただけたらと思います。

その地域で長期自然体験を子どもたちに経験してもらい、「生きる力」「非認知能力の向上」など「感動」を通じて次世代を担う人材育成に努め、青少年もまた同様です。

よろしく願いいたします。

滋賀県希望が丘文化公園

令和7年度文部科学省委託事業「希望ヶ丘夏休みわんぱくキャンプ」実施後評価

びわこ成蹊スポーツ大学 BIWAKO Outdoor Sport Center アドバイザリースタッフ 中野 友博

今回の6泊7日間で実施された「希望ヶ丘夏休みわんぱくキャンプ」は、長期自然体験活動（長期キャンプ）として実施されたものである。キャンプの目標は「自立」と「協力」をキーワードとしてプログラムデザインされた。その効果測定には、「生きる力（IKR）」と「マザーレイクゴールズ（MLGs）」の指標尺度を昨年度に引き続き用いた。

調査対象はキャンプ参加児童55名（小学4年生19名、小学5年生13名、小学6年生22名：男子児童21名、女子児童34名）で、アンケート分析対象は54名となっている。（回収率98.2%）

調査時期は、事前研修会&出合いの集いが実施された令和7年7月27日を事前調査、キャンプ終了後約1ヶ月後の9月17日が事後調査となる。

指導スタッフ36名（ディレクター・本部9名、キャンプリーダー27名）である。参加児童1名に対する比率は、1.5名となっている。

IKRについて、全体得点は、事前126.30（SD：20.64）、事後131.64（SD：20.95）となっており得点の有意な向上は見られなかった。下位因子では心理的社会的能力についてのみ、事前61.59（SD：11.37）、事後65.48（SD：10.12）と事前事後で有意な得点の向上が見られた。

MLGsについては、尺度4因子のうち「多様な生き物を守ろう（事前33.84（SD：5.26）、事後36.26（SD：4.25））」「地元も流域も学びの場に（事前34.18（SD：5.85）、事後36.71（SD：5.27））」の2因子に事前事後で有意な得点の向上が見られた。

IKR得点、MLGs得点、向上した具体的な考察については、キャンプに直接かかわられたキャンプリーダーたちのコメントからも明らかのように「自分で考えて行動する力」、「仲間と協力して物事を解決する力」がプログラム活動の中で試され、身につけることができた、またその土台ができたといえる。

アンケート得点の変化については、事前調査後に長期キャンプが実施された後、約1ヶ月日常生活に戻り様々な経験をしている。この1ヶ月は、キャンプ中経験したことを深化させたり、一般化させていく期間ともなるが、キャンプ前の状態に戻ることもなる。様々なキャンプ効果を取り扱った先行研究でも、キャンプ前とキャンプ直後ではその学びの効果が大きく向上するが、その効果は1ヶ月後まで維持されない報告もある。キャンプの効果は一度のキャンプ体験で大きく向上するというよりも何回ものキャンプを経験することで得点の増減を繰り返しながら、その効果が徐々に身についていくことが示されている。今回のキャンプにおいて、キャンプリーダーの主観的な評価からも参加児童のキャンプ中の行動変化や学びが述べられている。キャンプ中の学びの内容が1ヶ月後まで維持されなかったとも評価できる。

キャンプ参加児童について、募集型のキャンプのため、もともと「生きる力」の高い児童が多く参加してきたことも考えられる。同様の理由として昨年度参加者（リピーター）が多かった（リピート率〇〇%）こともIKR得点が有意に向上しなかった一因とも考えられる。

以上アンケート調査結果からのまとめであるが、キャンプ中の参加児童へのキャンプリーダーの対応、プログラムごとのふりかえりが大変丁寧に各参加者に実践されることは、小グループを対象に実施されるキャンプとして最も評価されることである。キャンプ本番までの準備と打合せ、キャンプ当日に実施されたふりかえり、報告書作成にあたっての各キャンプリーダーからの具体的なコメントなど今回のキャンプの目的を達成するために必要不可欠な組織であると考えられる。

その他、2つの観点からの評価として以下に挙げる。

1. テーマ、ストーリー、プログラムの検討に関する評価

- ストーリーの対象として取り上げた生き物：植物だけでいいのか？
- 「知識」の学びと「体験」の学びの組み合わせ、デザインの工夫。
- プログラムデザイン、7日間の流れを大切に、1日目があって2日目がある。7日間お流れが重要。

2. 教育的効果の調査・検証に関する評価

- 参加児童の特性（性別、学年、経験など）により学びの特徴は？
- キャンプリーダーの学びの検証は？

令和7年度文部科学省委託事業「希望が丘夏休みわんぱくキャンプ」実施後評価

滋賀県キャンプ協会副会長 滋賀県レクリエーション協会 理事長 溝江 透

1. 「IKR」および「MLGsの力」の分析結果から

① 非認知能力（生きる力）の高まり

非認知能力（文部科学省では「生きる力」）については、参加児童の事業実施前と実施後のIKR調査による評価において、本年度はその向上に優位さが認められない項目が多い状況にあるが、数値的には事後調査の結果が各項目とも高く、キャンプリーダーの所見からも子どもたち一人一人の心身の成長が認められたととらえることができる。

② 自然や環境への理解（MLGs）の深まり

MLGsについても、IKRと同じく昨年度と比較してその向上が大きくは見られなかったが、参加前の数値が高く、すでに意識の高い状況にあったものと考えられる。このことは、希望が丘文化公園の取り組みすべてでMLGsの力の向上に向けての活動を進めているとともに、昨年に引き続き参加している児童も多いことからこのような結果になったものと考えられる。

ストーリーを設定して、子ども達に様々な体験を意図的に仕組むことにより、「IKR」および「MLGsの力」がさらに強固なものとなり得ることは両分析結果から見られ、7日間の体験キャンプの成果があったと考える。

2. ストーリーが与えた影響について

希望が丘に棲む妖精さんがみんなで作成させた大切な本を復活させるための冒険をしようといったストーリーを設定しての7日間の活動は、子どもの印象にも残りやすく、見える成果もあり、協力の姿勢や活動の意欲など様々な力が向上したとの成果が報告されている。

キャンプにおいては体験そのものが重要であると思うが、様々な体験に向かうためにストーリーを持つことも本キャンプの目的達成に大きな影響を与えたものと評価したい。

3. リーダーの変容

今回の調査は参加児童の変容についてであるため、数字には現れてきていないが、各プログラムや、「IKR」および「MLGsの力」の分析結果におけるリーダーの所見や感想から、希望が丘のリーダーの変容も著しいと感じた。

各所見から、リーダーの接し方や子どもの成長への思いなどが伝わってくる。このキャンプに参加して、子どもたちの成長への達成感を感じると共にリーダー自身も大きく成長しているのではないかと感じる。

このように、本キャンプは、参加者自身の変容はもとより、直接子ども達と接した希望が丘リーダーや、キャンプから帰ってきた子どもの変容を目の当たりにしている保護者にとっても、自身の成長や変容へとつながっていることが推測される。このことも本キャンプの大きな成果の一つと考える。

令和7年度文部科学省委託事業「希望が丘夏休みわんぱくキャンプ」実施後評価

滋賀県シェアリングネイチャー協会 理事長 辻田 良雄

文部科学省委託事業「体験を通じた青少年自立支援プロジェクト」を自然環境が豊かな「希望が丘文化公園」で実施されたことに、敬意を払います。この希望が丘文化公園は、周りの環境が自然が豊かであるとともに、ここで実施されているさまざまな自然環境を活かした取り組みが多種多様に豊富に日常的に活発に実施されているという事業体であることこそできた事業だと考えられます。

ここでのテーマが、参加者一人一人の「生きる力」や「非認知能力」の向上を目的にして、「思いやり」や「強い絆」「深い感動」といった教育的に重要な指標を掲げておられることも注目すべきことです。そんな中でも、「自分で考えて行動する力」や「仲間と協力して物事を解決する力」を意図的に設計されていることは参加者にもわかりやすい目標設定だと考えられます。

また、琵琶湖を抱える滋賀県においては、自然環境を守ろうという意識が高いことが考えられます。そんな中でこの希望が丘文化公園が滋賀県が独自に策定されているMLGsの中の4つの重点項目を抽出して計画的実践的に取り入れられたことは、今後の滋賀県内の活動においてもこの活動報告が大いに活かされていくことになると考えられます。

実施結果の報告を確認していくと、昨年度の事業よりもより計画的にまたわかりやすく子どもたちに深く寄り添うような体験プログラムになっています。一つ一つのプログラムがより計画的に考えられています。そんな中で、特に、ストーリーを作っていくというプログラムに注目しました。これは毎日、一つ一つの活動がばらばらにあるのではなく、一本の軸として参加者の子どもたちの心に響くものが作られると考えられます。妖精というグループ共通のシンボルと作ったことで、子どもたち一人一人に仲間意識が生まれ、また、子どもたち一人一人が自分の内面の弱さなどを語りかけるチャンスを作り、活動していくエネルギーが生まれていったと考えられます。

こういった細かい配慮が、この事業を深く子どもたちに浸透していったと考えられます。また、このキャンプを支えたキャンプリーダー達の成長も確認していかねばなりません。「このキャンプを通して、先生になる という夢が強くなった。」「相手に寄り添う態度が子どもの安心感と挑戦する勇気につながることを実感しました」。こういったリーダーが育ったことは、このプロジェクトの大きな成果でもあると考えられます。

今回この希望が丘文化公園で実施されたプログラムは、自然体験をベースにした取り組みとして、自然豊かな地域での活動として大いに評価されていくと考えられます。というのは、そんなに特別なことを実施されているのではなく、参加者の子どもたちが自分たちで考えて実行できる身近な活動を実践したからです。

令和7年度文部科学省委託事業「希望が丘夏休みわんぱくキャンプ」実施後評価

株式会社マックアース 奥琵琶湖マキノパークホテル&セミナーハウス
ホテル事業マネージャー 野田 紗也夏

今回、私は直接的にわんぱくキャンプの運営に関わってはいませんが、実施後の事例発表を拝読し、掲げられたテーマに沿ったプログラムであったかを評価いたします。

まず、非日常的な環境で7日間を過ごすという長期の野外活動、そして1班10名未満という少人数体制は、子どもたちが「自分で考えて行動する力」や「仲間と協力して物事を解決する力」を育むうえで非常に適した条件であったと考えます。日常から離れた環境での生活は、子どもたちの主体性を引き出し、仲間との関わりを深める貴重な機会となったことでしょう。

また、キャンプ中に設定された10の大きなプログラムは、いずれも上記の目的を達成するためのきっかけとなり、子どもたちの成長を促す要因として機能していたと評価します。特に「5. リフレクション」は、活動を振り返り、自分の言葉で経験を整理する重要な時間であり、キャンプ後の生活にも良い影響が続くことを期待したい取り組みです。

一方で、キャンプリーダーの「7日間の経験を通じて」の中に示されていた時間に関する反省点は、今後のわんぱくキャンプをより良いものにするために最も重要な視点であると感じます。具体的には、子どもたちが活動に取り組む際に適切な時間設定であったか、考えをまとめ言葉にするための時間が十分に確保されていたか、そしてリーダー自身が子どもと向き合う余裕を持てる運営体制であったかという点です。これらは、プログラムの質を左右する根幹であり、次年度以降の改善に向けて丁寧に検討されるべき事項だと考えます。

以上の点から、今回のキャンプは目的に沿った有意義な取り組みであったと評価するとともに、時間設定や運営体制の見直しによって、さらに充実したプログラムへと発展する可能性を感じています。

令和7年度文部科学省委託事業「希望が丘夏休みわんぱくキャンプ」実施後評価

公益財団法人ボーイスカウト日本連盟評議員／日本ボーイスカウト滋賀連盟 副連盟長
ボーイスカウト甲賀第1団団委員長／甲賀市青少年自然体験活動推進委員会 委員長 吉久 義則

本事業の趣旨（目的）として、「実績を全国的な普及に努める」とあり、評価依頼の中の検討対象として、「全国展開を図る上で必要な方策の検討に関する評価」が挙げられていますので、その視点から述べさせていただきます。

なお、評価の対象とする資料、情報については、送付いただいた「発表資料」のみを拝読したものです。

発表資料では、個々のアクティビティについて、「ねらい」、「指導の工夫」、「結果・所感」が述べられています。また、日々のプログラムの展開についても、写真付きで報告されています。全体的に、キャンプリーダーの視点からの評価や感想が詳しく述べられていて、キャンプ全体が様々な成果を上げ、またキャンプリーダーも別の意味での成長を得られたのではないかと感じられます。

しかし、この事業の中心的な目的は、参加者（子どもたち）の「生きる力」や「非認知能力」を向上させ、心身の健全な発達を促すものです。参加者については、おそらく何らかの形で募集されて集まった子どもたちであり、多様な家庭環境や、経験や、参加動機などを背景に背負っていると思われます。

この参加対象者を理解し、それに応じた、そして事業の目的に照らした目標設定やアクティビティの選択、プログラムとしての流れの工夫など、様々な検討が事前にキャンプリーダーの間で議論されるべきですし、当然、議論されたのではないかと想像しています。しかしながら、それはこの発表資料からは、なかなか

読み取ることができませんでした。

キャンプリーダーが、プログラム展開の中でいろいろ参加者にアドバイスをしたり、状況に応じていろいろな工夫をしたり、参加者の成長を具体的に感じたりしたことはよく伝わってきました。それとは別に、キャンプリーダーが、キャンプが始まる前にどんな思いでアクティビティを設定したのか、お互いにどんな思いを議論しあったのか、そのような企画計画段階からの流れというもの、参加者を目標達成に導くためのアクティビティの選択、あるいはそれに対するキャンプ終了後のキャンプリーダーの自己評価などは、とても興味を引かれるところです。参加者の変化を伝えてくれる指標は、平均や標準偏差といった全体に対する数値のみで、なかなか個々の姿や変化が見えてこない感じを受けました。

この発表資料の段階では、まだそこには触れておられず、別の形で出てくるのかもわかりませんが、その流れが見えてくると、それは全国的な普及への大きな武器になるのではと考えます。

これからも、キャンプリーダーの若い力に大きく期待しています。

MEMO



A series of horizontal dashed lines for writing, spanning the width of the page.



MEMO



A series of horizontal dashed lines for writing, providing a guide for text alignment and spacing.



令和7年度 文部科学省委託事業「体験活動等を通じた青少年自立支援プロジェクト」
教育的効果の高い長期自然体験活動の構築事業

希望が丘夏休みわんぱくキャンプ実施報告書

令和8年2月発行

編集発行 公益財団法人滋賀県希望が丘文化公園
〒520-2551 滋賀県蒲生郡竜王町薬師1178
電話 077-586-1100 FAX 0748-58-0220
HP : <https://www.kiboupark-shiga.or.jp>

